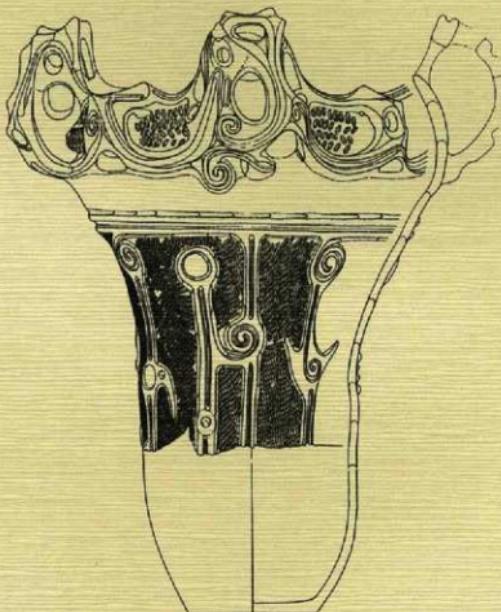


K-550

台ノ上遺跡

発掘調査報告書



米沢市教育委員会

台ノ上遺跡

発掘調査報告書

1997

米沢市教育委員会

序 文

本市の南方部に位置する「台ノ上遺跡」は、大正年間の米坂線工事の際に、偶然発見された遺跡と聞いております。また、今日に至るまで数多くの研究者によって、遺物の採集や試掘、発掘調査が繰り返し行われてきた遺跡の一つでもあります。

本市の教育委員会が主体となって実施した調査は、平成3年度の市道拡張工事に伴う発掘調査が最初であります。その後、住宅開発等によって調査が相次ぎ、今回の調査は5回目となります。

さて、今度の調査は個人の畠地基盤整備に伴う緊急発掘調査であり、文化庁の国庫補助事業として実施しました。当初は一カ年の予定でしたが、予想をはるかに上回る遺物、遺構が発見されたことにより、関係機関との調整を図りながら、二カ年の調査として実施した次第です。

その結果、大型住居跡3棟を含む、合計59棟の堅穴住居跡が重複して発見されました。遺物は約17万点に及び、特に土偶、土製品、石製品は、これまでの遺跡では例のない数量が出土しています。

のことから、本遺跡は山形県を代表する縄文時代中期中葉期の中心遺跡と考えられます。

また、この調査期間において、親子発掘や米沢市女子短期大学の野外授業なども行い、文化財の啓蒙にも努めて参りました。

本市教育委員会では、これらの貴重な資料を整理しながら、歴史並びに古代文化を探求し、豊かな郷土を築くため、文化財の保護、保存に一層努力する所存です。

本遺跡の調査にあたり、何かとご協力をいただきました地権者の達藤宗三郎氏、格別のご指導を賜りました加藤稔、川崎利夫の両氏、文化庁、山形県教育庁文化課に対し、心から感謝申し上げます。

1997年3月

米沢市教育委員会

教育長 相 田 実

例　　言

1. 本報告書は、文化庁の国庫補助を受けて、平成7年度（1995年）、平成8年度（1996年）の二年間に亘って実施した、台ノ上遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、米沢市教育委員会が主体となって、平成7年度は4月10日～同年10月10日まで、平成8年度は6月10日～同年10月25日の期間で実施した。
3. 調査体制は下記の通りである。（敬称略）

●平成7年度調査

調査総括　舟山豊弘（文化課長）
調査担当　手塚　孝（文化課埋蔵文化財係主任）
調査主任　菊地政信（文化課埋蔵文化財係主任）
作業員　赤木よし子、井上吉栄、遠藤　静、黒田よし子、小浦文吉
　　小間晴雄、小間ち江、黒沢栄美子、黒沢富雄、武田房次郎
　　高橋　實、堀田公司、松本三郎
事務局　我妻淳一（文化課長補佐兼埋蔵文化財係長）

●平成8年度調査

調査総括　舟山豊弘（文化課長）
調査担当　手塚　孝（文化課文化財係主任）
調査主任　菊地政信（文化課文化財係主任）
作業員　遠藤　静、小浦文吉、黒沢富雄、梅津治郎、木村芳浩
　　井上吉栄、戸田和子、木村省三、遠藤忠一、黒沢栄美子
　　黒田よし子、松本三郎、佐藤高義、佐藤裕子、近野慶子
　　赤木よし子、高橋信子、武田房次郎、大乗寺順子、中村茂子
　　井上さおり、堀田公司、五十嵐三郎、松本三郎
事務局　小林伸一（文化課長補佐）
　　山本　卯（文化課文化財係長）

○調　　査　指　導　　文化庁、山形県教育庁文化財課

○調　　査　協　力　　遠藤宗三郎

4. 本書で使用した各記号は、下記の通りである。

H Y - 積穴住居跡 D Y - 土壌 P - 柱穴 P Y - ピット G Y - 地床炉
E Y - 土器埋設石組炉 M Y - 埋設土器 I Y - 石組炉 T N - 積穴状土壤
F Y - 自然遺構 A Z - 土器 B Z - 石器

5. 揮図の縮尺は、各図面にスケールで示した。

6. 本書の作成は、菊地政信が担当し、全体的には手塚 孝が総括した。責任校正については山本 卵がその責務に当たった。

7. 本遺跡から出土した遺物については、復元整理し、米沢市教育委員会文化課埋蔵文化財資料室に一括保管している。

8. 石器の分類については、各群について実測図を作成し、細類を加えた。

9. 実測図を作成した遺物と写真図版に示した番号は同一とした。

10. 土色については『新版標準土色帳』(株日本色彩研究所、1970年発行)を使用した。

本文目次

序 文	
例 言	
I 遺跡の概要	1
II 調査の経過	1
III 検出遺構	3
1. 穴居跡	3
2. 土 壤	43
3. ピット	44
4. 埋設土器	44
IV 出土遺物	50
1. 出土土器	51
2. 土 偶	69
3. 土 製品	75
4. 石 器	80
V まとめ	107
参考文献	108
報告書抄録	110

挿図目次

第1図	台ノ上遺跡位置図とグリット配図	2
第2図	台ノ上遺跡HY 1平面図(1)	4
第3図	台ノ上遺跡HY 2・22平面図(2)	6
第4図	台ノ上遺跡HY 3・23・42平面図(3)	9
第5図	台ノ上遺跡HY 4平面図(4)	10
第6図	台ノ上遺跡HY 6平面図(5)	12
第7図	台ノ上遺跡HY 7平面図(6)	15
第8図	台ノ上遺跡HY 9・18平面図(7)	16
第9図	台ノ上遺跡HY 8・10・12平面図(8)	18
第10図	台ノ上遺跡HY 11平面図(9)	19
第11図	台ノ上遺跡HY 15・17平面図(10)	20
第12図	台ノ上遺跡HY 21・29平面図(11)	21
第13図	台ノ上遺跡HY 24平面図(12)	22
第14図	台ノ上遺跡HY 28平面図(13)	24
第15図	台ノ上遺跡HY 29・37・38・51平面図(14)	27
第16図	台ノ上遺跡HY 31・32平面図(15)	28
第17図	台ノ上遺跡HY 36平面図(16)	29
第18図	台ノ上遺跡HY 41平面図(17)	30
第19図	台ノ上遺跡HY 43・44他平面図(18)	32
第20図	台ノ上遺跡HY 43・54平面図(19)	33
第21図	台ノ上遺跡HY 45平面図(20)	34
第22図	台ノ上遺跡HY 46平面図(21)	35
第23図	台ノ上遺跡HY 47平面図(22)	36
第24図	台ノ上遺跡HY 48・53平面図(23)	38
第25図	台ノ上遺跡HY 49平面図(24)	41
第26図	台ノ上遺跡HY 50平面図(25)	42
第27図	台ノ上遺跡HY 52平面図(26)	45
第28図	台ノ上遺跡土壤平面図(1)	46
第29図	台ノ上遺跡土壤平面図(2)	47
第30図	台ノ上遺跡土壤平面図(3)	48
第31図	台ノ上遺跡土壤平面図(4)	49
第32図	台ノ上遺跡出土土器実測図(1)	52
第33図	台ノ上遺跡出土土器実測図(2)	54

第34図	台ノ上遺跡出土土器実測図(3)	55
第35図	台ノ上遺跡出土土器実測図(4)	56
第36図	台ノ上遺跡出土土器実測図(5)	58
第37図	台ノ上遺跡出土土器実測図(6)	59
第38図	台ノ上遺跡出土土器実測図(7)	60
第39図	台ノ上遺跡出土土器実測図(8)	62
第40図	台ノ上遺跡出土土器実測図(9)	63
第41図	台ノ上遺跡出土土器実測図(10)	64
第42図	台ノ上遺跡出土土器展開図(1)	65
第43図	台ノ上遺跡出土土器展開図(2)	66
第44図	台ノ上遺跡出土土器展開図(3)	67
第45図	台ノ上遺跡出土土器展開図(4)	68
第46図	台ノ上遺跡出土土偶実測図(1)	70
第47図	台ノ上遺跡出土土偶実測図(2)	71
第48図	台ノ上遺跡出土土偶実測図(3)	72
第49図	台ノ上遺跡出土土偶実測図(4)	73
第50図	台ノ上遺跡出土土偶実測図(5)	74
第51図	台ノ上遺跡出土土製品実測図	76
第52図	台ノ上遺跡出土三角形、円盤型土製品拓影図(1)	77
第53図	台ノ上遺跡出土円盤型土製品拓影図(2)	78
第54図	台ノ上遺跡出土円盤型土製品拓影図(3)	79
第55図	台ノ上遺跡出土Ⅰ群・Ⅲ群石器実測図(1)	81
第56図	台ノ上遺跡出土Ⅱ群・V群石器実測図(2)	82
第57図	台ノ上遺跡出土IV群石器実測図(3)	83
第58図	台ノ上遺跡出土VI群石器実測図(4)	84
第59図	台ノ上遺跡出土VI群石器実測図(5)	85
第60図	台ノ上遺跡出土VI群石器実測図(6)	86
第61図	台ノ上遺跡出土VI群石器実測図(7)	87
第62図	台ノ上遺跡出土Ⅰ・Ⅲ群石器形態分類表(1)	88
第63図	台ノ上遺跡出土IV群石器形態分類表(2)	89
第64図	台ノ上遺跡出土Ⅱ・V群石器形態分類表(3)	90
第65図	台ノ上遺跡出土VI群石器形態分類表(4)	91
第66図	台ノ上遺跡出土VII群石器実測図(8)	92
第67図	台ノ上遺跡出土VI・IX群石器実測図(9)	93
第68図	台ノ上遺跡出土VII群石器形態分類表(5)	94
第69図	台ノ上遺跡出土IX群石器形態分類表(6)	95

第70図 台ノ上遺跡出土Ⅶ群石器実測図⑩	96
第71図 台ノ上遺跡出土Ⅶ群石器実測図⑪	97
第72図 台ノ上遺跡出土Ⅶ群石器形態分類表(7)	98

付 表 目 次

表1 土器計測表	100
表2 土偶・土製品計測表	102
表3 三角形・円盤型土製品計測表	105

図 版 目 次

巻頭図版(1)	
巻頭図版(2)	
巻頭図版(3)	
巻頭図版(4)	
巻頭図版(5)	
第1図版 台ノ上遺跡の発掘(1)	
第2図版 台ノ上遺跡の発掘(2)	
第3図版 台ノ上遺跡の発掘(3)	
第4図版 台ノ上遺跡の発掘(4)	
第5図版 台ノ上遺跡出土の土器(1)	
第6図版 台ノ上遺跡出土の土器(2)	
第7図版 台ノ上遺跡出土の土器(3)	
第8図版 台ノ上遺跡出土の土器(4)	
第9図版 台ノ上遺跡出土の土器(5)	
第10図版 台ノ上遺跡出土の土器(6)	
第11図版 台ノ上遺跡出土の土器(7)	
第12図版 台ノ上遺跡出土の土器(8)	
第13図版 台ノ上遺跡出土の土器(9)	
第14図版 台ノ上遺跡出土の土器(10)	
第15図版 台ノ上遺跡出土の土器(11)	
第16図版 台ノ上遺跡出土の土器(12)	
第17図版 台ノ上遺跡出土の土器(13)	

- 第18図版 台ノ上遺跡出土の土器⑭
- 第19図版 台ノ上遺跡出土の土器⑯
- 第20図版 台ノ上遺跡出土の土器⑯
- 第21図版 台ノ上遺跡出土の土器⑰
- 第22図版 台ノ上遺跡出土の土器⑲
- 第23図版 台ノ上遺跡出土の土器⑲
- 第24図版 台ノ上遺跡出土の土器⑳
- 第25図版 台ノ上遺跡出土の土器㉑
- 第26図版 台ノ上遺跡出土の土器㉒
- 第27図版 台ノ上遺跡出土の土器㉓
- 第28図版 台ノ上遺跡出土の土偶(1)
- 第29図版 台ノ上遺跡出土の土偶(2)
- 第30図版 台ノ上遺跡出土の土偶(3)
- 第31図版 台ノ上遺跡出土の土偶(4)
- 第32図版 台ノ上遺跡出土の土偶(5)
- 第33図版 台ノ上遺跡出土の土偶(6)
- 第34図版 台ノ上遺跡出土の土偶(7)
- 第35図版 台ノ上遺跡出土の土偶(8)
- 第36図版 台ノ上遺跡出土の土偶(9)
- 第37図版 台ノ上遺跡出土の土偶⑩
- 第38図版 台ノ上遺跡出土の土偶⑪
- 第39図版 台ノ上遺跡出土の土器、土製品⑫
- 第40図版 台ノ上遺跡出土の三角型土製品(1)
- 第41図版 台ノ上遺跡出土の三角型土製品(2)
- 第42図版 台ノ上遺跡出土の三角型土製品、円盤型土製品(3)
- 第43図版 台ノ上遺跡出土の三角型土製品(4)
- 第44図版 台ノ上遺跡出土の三角型土製品(5)
- 第45図版 台ノ上遺跡出土の三角型土製品(6)
- 第46図版 台ノ上遺跡出土の三角型土製品(7)
- 第47図版 台ノ上遺跡出土の三角型土製品(8)
- 第48図版 台ノ上遺跡出土の三脚石製品、三角型石製品(1)
- 第49図版 台ノ上遺跡出土の三脚石器(1)
- 第50図版 台ノ上遺跡出土の三脚石器(2)
- 第51図版 台ノ上遺跡出土の三脚石器(3)
- 第52図版 台ノ上遺跡出土の石器(1)
- 第53図版 台ノ上遺跡出土の石器(2)

- 第54図版 台ノ上遺跡出土の石器(3)
第55図版 台ノ上遺跡出土の石器(4)
第56図版 台ノ上遺跡出土の石器(5)
第57図版 台ノ上遺跡出土の石器(6)
第58図版 台ノ上遺跡出土の石器(7)
第59図版 台ノ上遺跡出土の石器(8)
第60図版 台ノ上遺跡出土の石器(9)
第61図版 台ノ上遺跡出土の石器(10)
第62図版 台ノ上遺跡出土の石器(11)
第63図版 台ノ上遺跡出土の石器(12)
第64図版 台ノ上遺跡出土の石器(13)
第65図版 台ノ上遺跡出土の石器(14)
第66図版 台ノ上遺跡出土の石器(15)
第67図版 台ノ上遺跡出土の石器(16)
第68図版 台ノ上遺跡出土の石器(17)
第69図版 台ノ上遺跡出土の土器、土製品(18)
第70図版 台ノ上遺跡出土の土器(19)
第71図版 台ノ上遺跡出土の石器(20)
第72図版 台ノ上遺跡出土の石器(21)
第73図版 台ノ上遺跡出土の礫石器(1)
第74図版 台ノ上遺跡出土の礫石器(2)
第75図版 台ノ上遺跡出土の岩偶、石棒(1)
第76図版 台ノ上遺跡出土の石棒(2)



▲遺構全景（上空から）



▲HY 1掘り下げ状況（北方から）



▲HY41発掘状況（南方から）



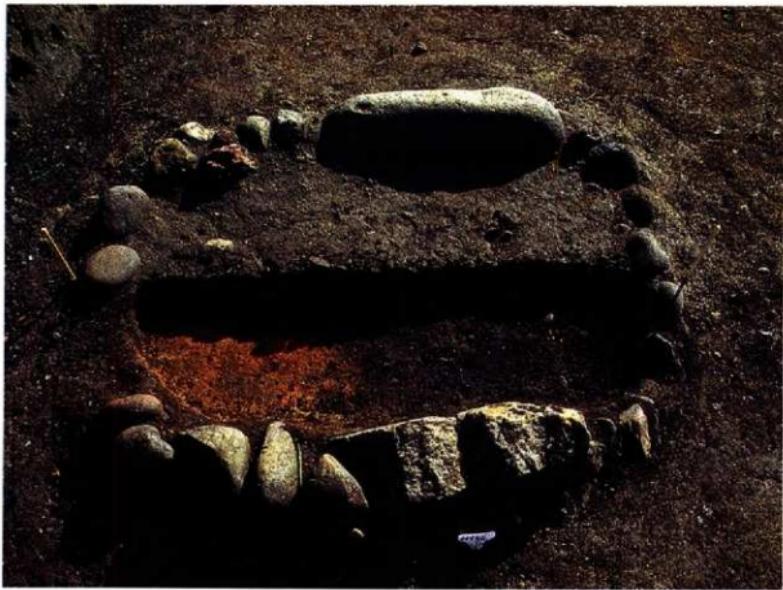
▲HY47発掘状況（東方から）



▲ H Y 32完成状況（東方から）



▲ H Y 50完成状況（南方から）



▲HY51、IY7の半裁状況（西方から）



▲TN15完形土器出土状況（南方から）



▲埋設土器 A Z 252、180出土状況（東方から）



▲A Z 223~225出土状況（北方から）

I 遺跡の概要

台ノ上遺跡は米沢市街地の南部に位置する。面積は南北740m、東西230mの約17万m²に及ぶ縄文時代中期中葉を中心とする遺跡で、他に縄文前期末～中期初頭の遺物も認められる。遺跡が分布する台地は、松川によって形成された細長い自然堤防状に立地する。この地形は、旧松川が東西に分かれて流れたことによって形成された台地であり、当時は川が台地を囲むように左右に流れる環境にあったと推測される。

遺跡の発見は地元の人の話によると、JR米坂線の工事の際に遺跡の台地を削平して土砂を運搬したときに多量の土器が出土したことが最初の発見と考えられている。記録によれば、米坂線の工事は大正11年～大正15年の期間であり、1920年代に遺跡が発見されたことになる。その後、本遺跡に关心を寄せる人たちが多く訪れ、遺物の採集や試掘、発掘調査が行われてきた。これらの調査及び採集品の中には、土偶、勾玉、石冠、石棒、石皿、縄文土器等の遺物が知られている。

発掘調査としては、昭和37年に米沢女子高等学校の調査団による、遺跡南側の一部の発掘が最初であり、その後昭和45年には、置賜考古学会によって遺跡北西部の調査が行われ、堅穴住居跡の一部や土壙、墓壇等、多量の遺物が発見された。平成3年と平成4年には、米沢市教育委員会が市道改修工事に伴う緊急調査として発掘調査を実施し、炉跡や土壙群が検出されている。今回の調査は通算で5回目となる。

II 調査の経過

1. 平成7年度、調査の経過

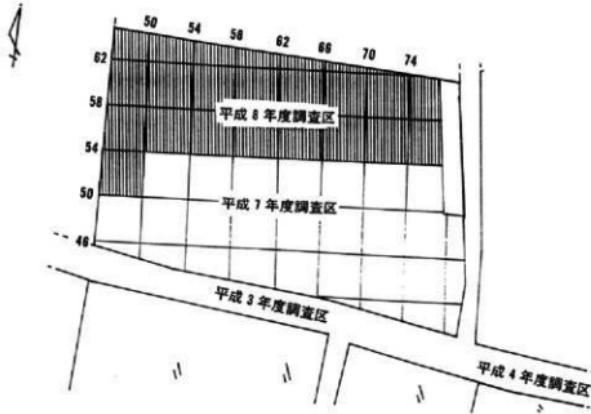
今回の調査は個人所有の畠地基盤整備に伴う緊急調査として実施したもので、工事範囲6,000m²のうち、直接遺跡に影響を及ぼす3,000m²を対象に平成7年4月10日～同年8月31日の日程で開始した。しかし、予想以上の多量の遺物と、多くの遺構が密集していることから9月22日まで延長して調査を実施した。その後、平面図作成を10月5日まで行い、平成7年度の調査を終了した。精査面積は1,500m²であり、残りの半分については次年度に着手することを関係機関との協議で決定した。

2. 平成8年度、調査の経過

平成7年度調査区の北側を対象に実施したもので、平成8年6月10日～同年9月30日の日程で実施したが、前年と同様に、予想を遥かに上回る遺物、遺構が出土し、終了には同年10月25日まで要した。調査は、前年の調査で掘り出した土砂を重機で南側に移動し、次いで重機による、遺構確認面の直上までの剥離を、6月12日まで行った。6月13日からは全体の面整理及び精査を行い、6月20日に遺構を確認、6月27日からは遺構の掘り下げを進め、7月10日までに上層部の掘り上げを完了した。9月26日には空中写真の撮影を実施し、翌日9月27日に現地説明会を行った。約100人が参集した。



台ノ上遺跡位置図



第1図 台ノ上遺跡位置図とグリッド配置

III 検出遺構

調査区からは次の遺構群を検出した。堅穴住居58棟、土壙309基、ピット325基、さらに埋設土器23基、石組炉10基、土器埋設石組炉4基、地床炉22基、堅穴状遺構15基、自然遺構4基となる。これらの遺構群は重複した状況を呈し、遺物を多量に含むものが多く認められた。全体図の付図で示すように、住居群跡は、西南部の空間地帯を囲むように構築されている。時期は大木7b式から大木8b式併行を主体とする。

平面形状は、大別すると方形と円形に区別され、前者は大型住居跡に多く認められ、後者は小規模な住居跡に認められる。大型住居跡は5棟存在し、最長はHY43で長さは18mを測る。土壙は西南に集中する傾向を有する。ピットは堅穴住居跡に付随する柱穴を除いた数である。埋設土器は東側に多く集中するが、全体的にみると東から北へ、北から東へと、環状に配置された様相がうかがえる。

石組炉を伴う住居跡は6棟あり、いずれも大木8b式併行に位置する。配置から吟味すると、HY6、4、50、51の4棟は同時期の構築であろう。地床炉は、今回の調査において最も多く認められた炉の形態であり、ポール状に掘り込んだ形態と、床面を焼床とした2形態がある。堅穴状遺構は、HY47周辺に多く認められる形態である。この遺構に関しても2形態に分類される。自然遺構は、西南に集中して確認された。セクションから判断して風倒木跡である。以下、各住居跡について述べる。

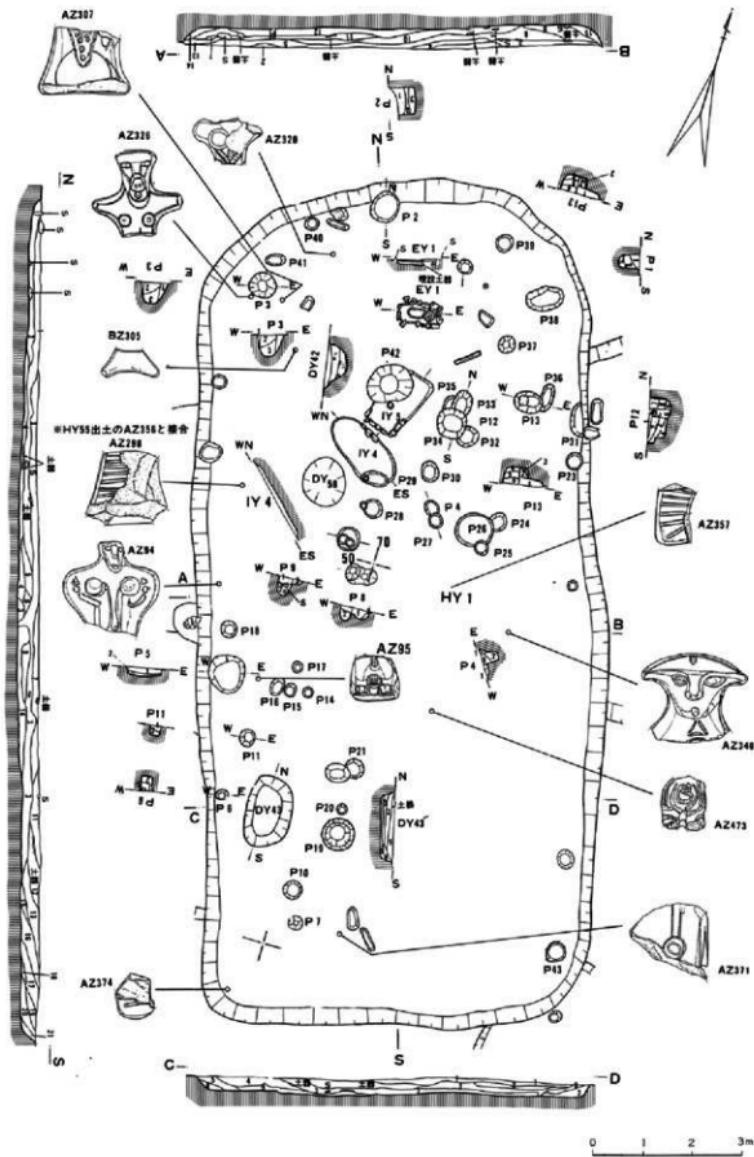
1. 堅穴住居跡〔第2図～第27図、付図〕

住居番号〔HY1〕 第2図

1. 平面形状・規模一隅丸方形で、幅8.32m、長さ17.00mを測る。
2. 切合関係-HY4、5と重複、HY41はHY1廃絶後に建てられている。
3. 壁の状況-北、南側が深く36cmを有し、壁面は約45度の傾斜を呈する。東西は26cm。
4. 柱穴・床面-床面は平坦である。壁直下及び北方部に集中し、30～50cmの径を有す。
5. 炉跡の状況-石組土器埋設炉(EY1)が1基、石組炉(IY4・5)が2基認められる。
6. 出土遺物-三脚石器4点、磨製石斧8点、打製石斧3点、石鏃10点、スクレーパー13点、石錐10点、三脚土製品1点、一括土器28点、土偶11点、埋設土器1点、三角型土製品2点、石匙6点、完形土器3点、凹石60点、磨石61点、石皿31点、その他2点。土器片7466、剝片654、総数8374。
7. 年代-大木8b式併行に位置する。
8. 特徴-大型形態を呈し、遺物が多量に出土する。中心的な建物と考えられる。

住居番号〔HY2〕 第3図

1. 平面形状・規模-長円形を呈し、長さで11.20m、幅3.85mを有す。
2. 切合関係-北側にHY32、南側にHY22があり、重複している。
3. 壁の状況-東壁面は44cmと深く、直角に近い傾斜を有している。
4. 柱穴・床面-12本の柱穴を壁直下に配す。柱穴の深さは30～50cmを測る。床面は平坦。
5. 炉跡の状況-明確な炉跡はないが、床面から焼土の集中した場所が認められた。



第2図 台ノ上遺跡HY1 平面図(1)

6. 出土遺物—三脚石器2点、磨製石斧3点、打製石斧2点、スクレーパー3点、一括土器11点、土偶3点、石匙6点、凹石28点、磨石38点、石皿11点。土器片4119点、剥片153点、総数4379点。 7. 年代—大木8b式併行
8. 特徴—東側が二段になっている形態を呈する。

住居番号【HY3】 第4図

1. 平面形状・規模—楕円形と推測され、長径5.00m、短径3.67mを呈すと考えられる。
2. 切合関係—HY2・5・22・23の4棟の竪穴住跡に重複している。
3. 壁の状況—南側が3cmと浅く、北側は30cmと深い。壁面はゆるやかに立ち上がる。
4. 柱穴・床面—北から南側に若干傾斜しており、柱穴は2本しか認められない。
5. 出土遺物—三脚石器1点、一括土器1点、土偶2点、凹石21点、磨石1点、石皿3点。土器片1005点、剥片24点、総数1058点。 7. 年代—大木8b式併行
8. 特徴—土偶が2点出土している。

住居番号【HY4】 第5図

1. 平面形状・規模—楕円形を呈し、長径8.50m、短径7.23mを測る。
2. 切合関係—HY1、41と重複している。HY1に西側を削平されている。
3. 壁の状況—ゆるやかに立上り、平均の深さは21cmを測る。
4. 柱穴・床面—28本の柱穴が認められ、平坦な床面にはMY7を設置している。
5. 炉跡の状況—IY3とした石組炉である。DY75にも少量の焼土が認められた。
6. 出土遺物—三脚石器2点、磨製石斧2点、石鏃1点、スクレーパー6点、石錐1点、一括土器10点、土偶2点、石匙1点、凹石7点、磨石14点、石皿5点。土器片1654点、剥片68点、総数1773点。 7. 年代—大木8b式併行
8. 特徴—IY3とした石組炉の南東部に小型土器が配置してある。

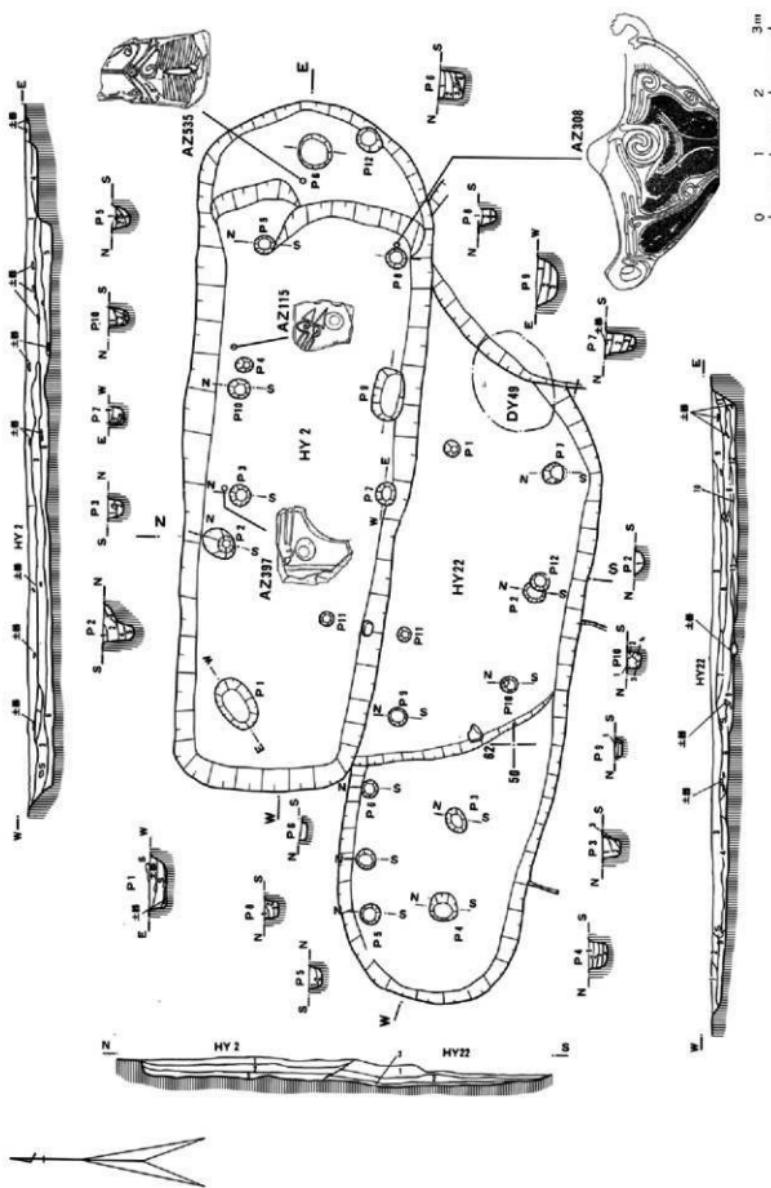
住居番号【HY5】

1. 平面形状・規模—円形(プランだけ確認)
2. 切合関係—HY1、3と重複
3. 出土遺物—スクレーパー1点。剥片15点、総数16点。
4. 年代—大木8b式併行
5. 特徴—掘り下げを実施しなかった住跡である。

住居番号【HY6】 第6図

1. 平面形状・規模—ほぼ円形状を呈する。6.50m×4.35mを現況で測る。
2. 切合関係—HY7、46と重複している。更にTN5とした大型土壙とも重複する。
3. 壁の状況—壁面はゆるやかに立上り、平均で12cmと浅い状況を呈する。
4. 柱穴・床面—9本が認められ、床面はほぼ平坦である。床面の土は砂質であった。
5. 炉跡の状況—IY1とした土器埋設石組炉である。埋設土器は2個認められる。
6. 出土遺物—磨製石斧1点、打製石斧1点、スクレーパー1点、三脚土製品1点、一括土器4点、その他土製品1点、凹石8点、磨石4点、石皿1点。土器片871点、剥片28

第3図 古ノ上遺跡HY2-22 平面図(2)



点、総数943点。 7. 年代一大木8 b式併行

8. 特徴—南方部に大型の礫を配した土器埋設炉を有す住居跡である。

住居番号【HY7】 第7図

1. 平面形状・規模—楕円形状を呈し、長径6.45m、幅5.48mを測る。
2. 切合関係—HY6、12、17、20、46と重複している。
3. 壁の状況—壁面はほぼ直角に立上り、平均の深さは20cmを測る。
4. 柱穴・床面—柱穴は22本、壁直下に認められる。床面は中央部が若干凹を呈する。
5. 炉跡の状況—ほぼ中央部に位置する。DY46が地床炉と推測される。
6. 出土遺物—三脚石器1点、磨製石斧1点、打製石斧1点、石籠1点、スクレーパー5点、石錐1点、一括土器5点、石棒1点、三角型土製品1点、石匙1点、小型土器1点、凹石15点、磨石10点、石皿8点。土器片620点、剝片124点、総数796点。

7. 年代一大木8 a式併行

8. 特徴—小規模な柱穴を壁直下に配した住居跡であり、2基の土壙が認められる。

住居番号【HY8】 第8図

1. 平面形状・規模—楕円形状を呈し、長径5.40m、幅4.66mを測る。
2. 切合関係—HY10、12、14と重複している。
3. 壁の状況—東はゆるやかに、西はほぼ直角に立ち上がる。深さは平均18cmを有す。
4. 柱穴・床面—東から西へ若干傾斜している。柱穴は4本壁面に認められる。
5. 炉跡の状況—土壙群が床面を掘り込んで構築されているため不明といわざるを得ない。
6. 出土遺物—三脚石器1点、磨製石斧1点、打製石斧1点、凹石7点、磨石8点、石皿4点。土器片409点、剝片34点、総数465点。

7. 年代一大木8 a式併行

8. 特徴—4基のフラスコ状土壙によって床面の大部分が消滅している。

住居番号【HY9】 第8図

1. 平面形状・規模—円形状を呈すと推測され、ほぼ半分を掘り下げた現況である。
2. 切合関係—HY18と重複。ちなみにHY18は大木8 a式土器が中心の住居跡である。
3. 壁の状況—ゆるやかに立上り、深さは10cmと浅い形態を有する。
4. 柱穴・床面—壁直下に12本認められ、平坦な床面にはMY5の埋設土器が出土した。
5. 炉跡の状況—全体を精査していないので、はつきりとは言えないが、地床炉と考える。
6. 出土遺物—三脚石器1点、スクレーパー1点、埋設土器1点、土笛1点、磨石3点、石皿1点。土器片214点、剝片16点、総数238点。

7. 年代一大木7 b式併行

8. 特徴—HY9の掘り方が深いのでHY18を切っているように見える。土笛が出土。

住居番号【HY10】 第9図

1. 平面形状・規模—円形状を呈すと考えられ、直径は6.55mを測る。
2. 切合関係—HY8、14と重複する。東方部は農道になっており、全体の形態は不明。

3. 壁の状況－北側の壁面は削平されて浅く2～3cmである。南側は10cmを測る。
4. 柱穴・床面－壁直下周辺に13本を確認、床面は南から北へ傾斜した状況を呈す。
5. 炉跡の状況－G Y 2 の地床炉が中央のやや北東よりに配置されている。
6. 出土遺物－磨製石斧1点、打製石斧2点、スクレーパー3点、一括土器1点、埋設土器2点、凹石10点、磨石4点、石皿2点。土器片419点、剝片30点、総数474点。
7. 年代－大木8a式併行
8. 特徴－住居跡南東部床面にMY 1、2の2個の埋設土器を並列して埋納している。

住居番号【HY11】 第10図

1. 平面形状・規模－西北が隅丸、頭部が円形を呈する形状で長径は6.12mを測る。
2. 切合関係－HY13、15、41と重複している。HY41は大木8b式併行の住居である。
3. 壁の状況－東は直角に近い立上り、西はゆるやかに立ち上がる。壁の深さは18cm。
4. 柱穴・床面－東方部の壁直下周辺に集中して認められる。床面は平坦である。
5. 炉跡の状況－明確な炉跡は確認されなかった。
6. 出土遺物－三脚石器1点、磨製石斧1点、スクレーパー3点、一括土器1点、凹石5点。土器片730点、剝片54点、総数795点。
7. 年代－大木8a式併行
8. 特徴－MY 4 が南東部に位置す。大木7b式併行の深鉢形土器で底部は欠損。

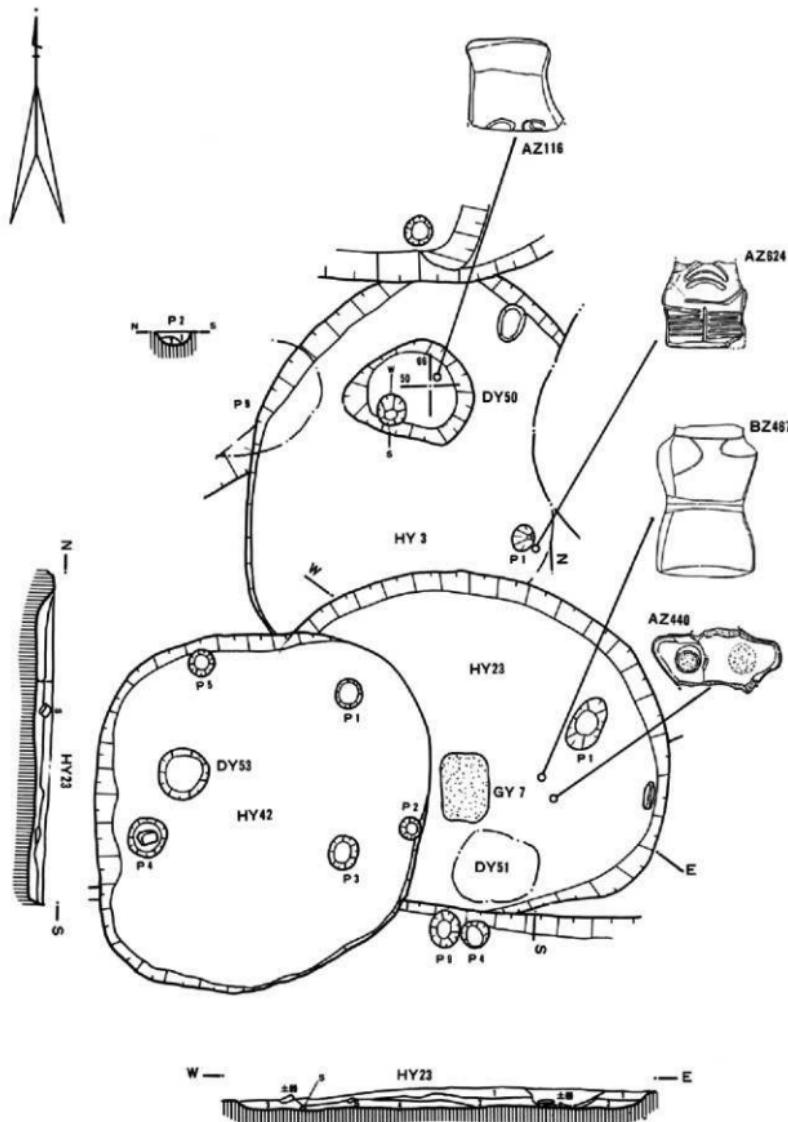
住居番号【HY12】 第9図

1. 平面形状・規模－円形状を呈すと考えられ、長径は5.85mを測る。
2. 切合関係－HY 7、8、17、20の4棟と重複している。
3. 壁の状況－東はゆるやかに、西は直角に近い立上りを有する。深さは平均で20cmある。
4. 柱穴・床面－11本認められ、東から西へやや傾斜している。
5. 炉跡の状況－G Y 3、4の焼土集中箇所が地床炉と考えられる。
6. 出土遺物－一括土器1点、埋設土器1点、凹石3点、磨石5点、石皿2点。土器片515点、剝片51点、総数578点。
7. 年代－大木7b式併行
8. 特徴－一本遺跡では古いタイプに位置する住居跡の一つであり、石組炉をもたない。

住居番号【HY13】 付図1

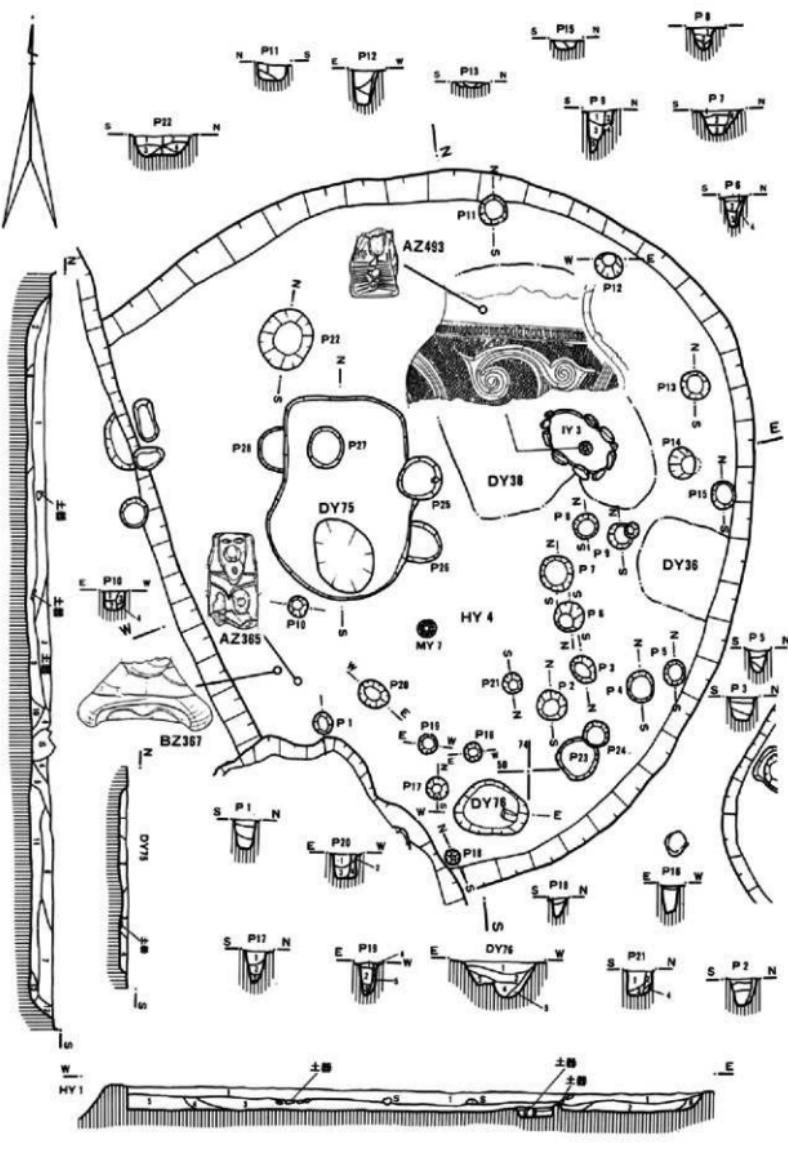
1. 平面形状・規模－隅丸方形と推測される。
2. 切合関係－HY 8、10、11、12、15、17の6棟と重複する。
3. 壁の状況－北側の一部しか確認できなかったが、ゆるやかに立ち上がる形態と考える。
4. 柱穴・床面－南から北へ、ゆるやかに傾斜している。
5. 炉跡の状況－明確には確認できなかったが、床面の状況から地床炉と推測したい。
6. 出土遺物－三脚石器2点、打製石斧1点、三脚土製品1点、一括土器3点、耳飾り1点、凹石5点、磨石2点。土器片401点、剝片67点、総数483点。
7. 年代－大木8a式併行
8. 特徴－半円形状に周溝が確認されている。

住居番号【HY14】 付図1



第4図 台ノ上遺跡HY 3-23-42 平面図(3)

0 1 2 3m



第5図 台ノ上遺跡HY 4 平面図(4)

0 1 2 3m

1. 平面形状・規模一隅丸方形を呈すと推測され、長さは7.80m、幅4.00mを想定する。
2. 切合関係-H Y 8、10、16の3棟と重複する。
3. 壁の状況ー北方の一部しか残存していないが、ゆるやかに立ち上がる解釈したい。
4. 柱穴・床面ー11本認められる。東から西へ少し傾斜している。
5. 炉跡の状況ーG Y 1 の地床炉がH Y 14の炉跡であろう。
6. 出土遺物ー磨製石斧1点、三角型土製品1点、凹石3点、磨石1点。
7. 年代ー大木8a式併行
8. 特徴ー柱穴の配置から全体を把握した。東に伸びる住居跡であろう。

住居番号【H Y 15】 第11図

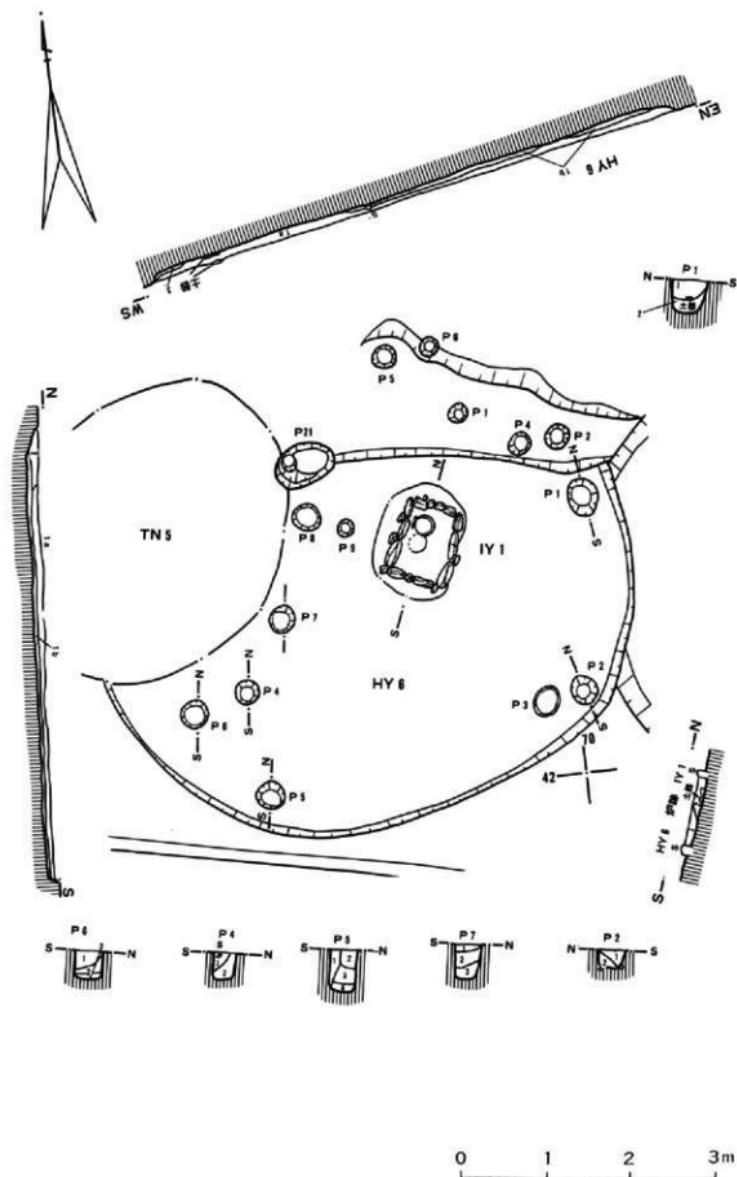
1. 平面形状・規模一楕円形状を呈す。推測で長径4.50m、短径4.15mを測る。
2. 切合関係-H Y 1、11、17の3棟と重複関係にある。
3. 壁の状況ー壁面はゆるやかに立上り、深さは10cmと浅い。
4. 柱穴・床面ー壁直下が9本と多く認められ、床面は平坦である。
5. 炉跡の状況ー炉跡の痕跡は認められなかった。
6. 出土遺物ー石鏃1点、凹石2点、磨石1点。土器片153点、剥片23点、総数180点。
7. 年代ー大木8a式併行
8. 特徴ー床面のD Y 13、14は中央部に大型の礎を配した形態で、墓壙と考えられる。

住居番号【H Y 16】 付図1

1. 平面形状・規模ー長径5.00mを有する円形状と推測される。
2. 切合関係ーH Y 13、14と重複しており、北東部の壁面だけが現存する。
3. 壁の状況ーゆるやかに立上り、10cmと浅い。
4. 柱穴・床面ー3本が認められ、床面は土壤の構築によって大半を失っている。
5. 炉跡の状況ー前記した状況から不明と言わざるを得ないが、地床炉であろう。
6. 出土遺物ー三脚石器1点、石鏃1点、スクレーパー1点、一括土器1点、凹石4点、磨石2点。土器片123点、剥片35点、総数168点。
7. 年代ー大木7b式併行
8. 特徴ー壁直下に柱穴を配する。竪穴住居跡と推測される。

住居番号【H Y 17】 第11図

1. 平面形状・規模ー隅丸方形を呈し、長さ6.00m、幅4.46mを測る。
2. 切合関係ーH Y 7、12、15の3棟と重複している。
3. 壁の状況ー壁面はほぼ直角に立上る形態を有する。
4. 柱穴・床面ー壁直下、壁面に11本認められる。床面は北部が少し傾斜している。
5. 炉跡の状況ー確認されていない。
6. 出土遺物ー打製石斧1点、石鏃2点、スクレーパー3点、三脚土製品1点、一括土器3点、石匙2点、凹石6点、磨石5点。土器片570点、剥片124点、総数717点。
7. 年代ー大木8a式併行



第6図 台ノ上遺跡HY 6 平面図(5)

8. 特 微—長軸方向はほぼ東西に位置する形態である。

住居番号【HY18】 第8図

1. 平面形状・規模—長円形状を呈し、長径 6.00m、短径 4.50m を測ると推測される。
2. 切合関係—HY 9 が南方に隣接する重複関係を呈す。
3. 壁の状況—いずれの箇所の壁もゆるやかに立ち上がる。
4. 柱穴・床面—壁直下を中心に 20 本確認された。床面はほぼ平坦である。
5. 炉跡の状況—確認されなかったので、不明と言わざるを得ない。
6. 出土遺物—埋設土器 1 点、凹石 3 点、磨石 1 点。土器片 196 点、剝片 12 点、総数 201 点。
7. 年代—大木 8 a 式併行
8. 特 微—重複する HY 9 は大木 7 b 式併行の住居跡である。平面図の切合が問題。

住居番号【HY19】 付図 1

1. 平面形状・規模—長径が 4.00m を有する円形と推測される。
2. 切合関係—東側を HY 1、西側を HY 23、南方を HY 21、46 の各住居跡と重複する。
3. 壁の状況—掘り下げていないので不明である。
6. 出土遺物—覆土上面から土偶が 1 点出土している。磨石 1 点。剝片 7 点、総数 9 点。
7. 年代—大木 8 a 式併行
8. 特 微—周辺の竪穴住居跡によって削平され、約 3 分の 1 が残存する状況であった。

住居番号【HY20】 付図 1

1. 平面形状・規模—長径 4.30m の不整円形状を呈す形状と推測される。
2. 切合関係—北方部が HY 7 と重複している。
3. 壁の状況—壁面はゆるやかに立上り、深さは 10cm と浅い形態を呈す。
4. 柱穴・床面—HY 7 の南方部に位置する柱穴の 2 本がある。床面は平坦であった。
6. 出土遺物—三角型土製品 1 点、磨石 3 点、石皿 1 点。剝片 12 点、総数 17 点。
7. 年代—大木 8 b 式併行
8. 特 微—住居跡の 3 分の 1 を精査。土器の関係からいえば HY 7 を切る形態である。

住居番号【HY21】 第12図

1. 平面形状・規模—東西に長い隅丸形状を呈し、長さ 14.50m、幅 6.30m を測る。
2. 切合関係—HY 6、23、42、46 と重複している。
3. 壁の状況—ゆるやかに立上り、深さは西側で 12cm、東がやや深く 20cm を有す。
4. 柱穴・床面—22 本が壁直下周辺に配置している。東から西へやや傾斜している。
5. 炉跡の状況—G Y 8 の地床炉 1 基が認められた。
6. 出土遺物—三脚石器 7 点、磨製石斧 1 点、打製石斧 1 点、石鐵 3 点、スクレーパー 11 点、石錐 2 点、三脚土製品 1 点、一括土器 6 点、土偶 1 点、彩色土器 1 点、黒曜石 2 点、石棒 1 点、凹石 18 点、磨石 21 点、石皿 17 点。土器片 1940 点、剝片 265 点、総数 2298 点。
7. 年代—大木 8 b 式併行。ちなみに重複する住居跡群も同時期である。
8. 特 微—西方の床面から完形の石棒が発見された。本来は立石してあったものと考える。

住居番号〔HY22〕 第3図

- 平面形状・規模—長円形を有し、長さは現況で11.50m、幅は3.30mを測る。
- 切合関係—北側をHY2、東部とHY3の住居跡によって削平されている。
- 壁の状況—西側は浅くゆるやかに立上り、東側は深くやや急勾配に立ち上がる。
- 柱穴・床面—壁直下に12本認められる。床面は西から東へ傾斜している。
- 炉跡の状況—床面は砂利層である。明確な炉跡は認められないが、焼土が出土した。
- 出土遺物—磨製石斧6点、打製石斧3点、石鏃1点、スクレーパー7点、石錐2点、一括土器10点、石匙1点、小型土器1点、耳飾り1点、凹石15点、磨石17点、石皿16点、土器片1041点、剥片107点、総数1228。
- 年代—大木8b式併行。
- 特徴—一切り合い関係から言えば、長円形が古く、隅丸方形が新しいと言える。

住居番号〔HY23〕 第4図

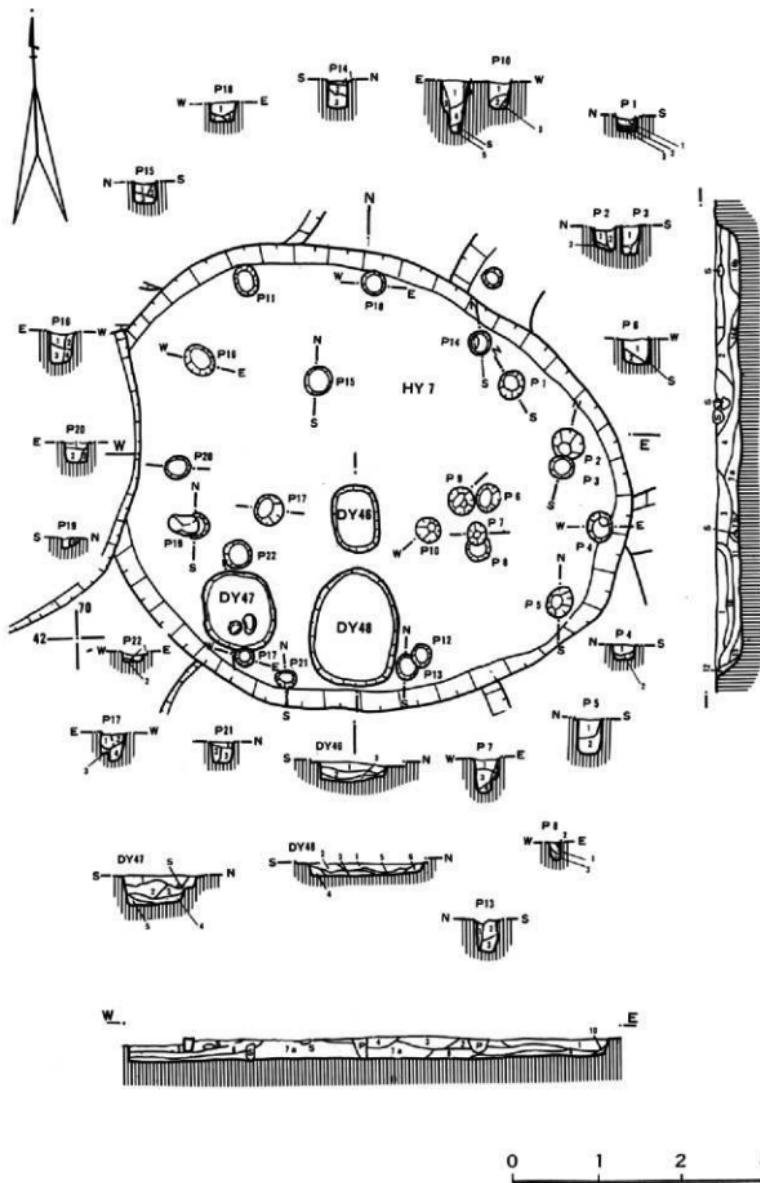
- 平面形状・規模—橢円形状を呈する。長径4.90m、短径4.10mを有すと推測する。
- 切合関係—西方のHY42、北方HY3、東方HY19、南方HY21と重複する。
- 壁の状況—壁面はゆるやかに立上る形態である。深さは西方で10cm、東方で20cmある。
- 柱穴・床面—1本しか認められなかった。床面は平坦であり、北部壁面に礫を配す。
- 炉跡の状況—中央からやや南方よりの位置にGY7の地床炉が認められる。
- 出土遺物—一括土器7点、岩偶1点、土偶1点、円盤型土製品1点、完形土器1点、凹石1点、磨石1点、石皿5点。土器片524点、剥片14点、総数556点。
- 年代—大木8b式併行
- 特徴—東西に長径を呈する住居跡であり、岩偶が出土している。

住居番号〔HY24〕 第13図

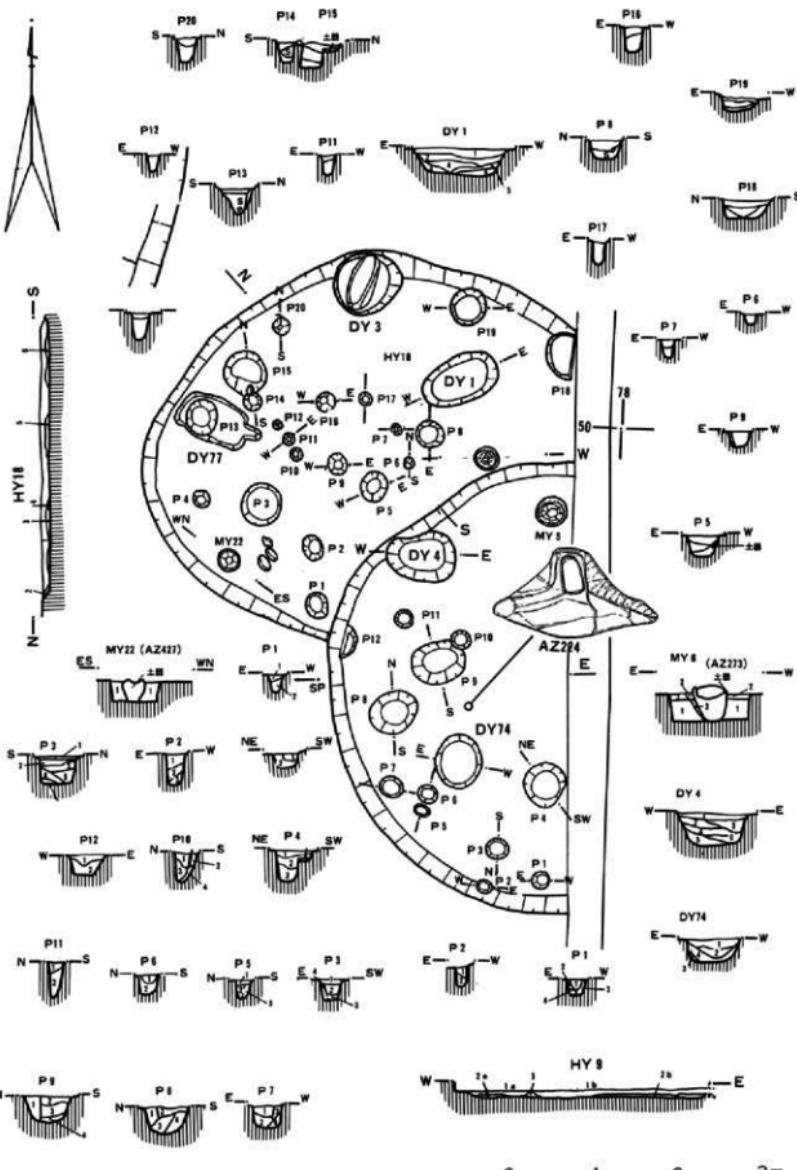
- 平面形状・規模—長軸が東西を有する隅丸方形を呈する。長さ18.90m、幅6.00mを測る。
- 切合関係—東西の端部が重複する形態で、東方にHY29、西方にHY28が位置する。
- 壁の状況—やや急勾配に立上り、10~15cmと浅い掘り方である。
- 柱穴・床面—38本確認された。床面は東から西へゆるやかに傾斜している。
- 炉跡の状況—焼土及び炉跡は発見されなかった。
- 出土遺物—三脚石器8点、磨製石斧3点、打製石斧9点、石鏃1点、スクレーパー19点、石錐8点、三脚土製品1点、一括土器2点、石匙2点、耳飾り1点、凹石7点、磨石13点、石皿2点。土器片2123点、剥片96点、総数2286点。
- 年代—大木8b式併行
- 特徴—大型住居跡に分類される。土偶の出土は認められなかった。

住居番号〔HY25〕

- 平面形状・規模—長円形と推測される。長径6.00m、短径4.00mをしたい。
- 切合関係—HY1の床面からプランが確認された。HY41、46と重複する。
- 壁の状況—掘り下げていないので不明である。



第7図 台ノ上遺跡HY7 平面図(6)



第8図 台ノ上遺跡HY9、18 平面図(7)

6. 出土遺物—スクレーバー1点、石錐1点、一括土器3点、三角型土製品1点、その他土製品1点。土器片408点、剝片26点、総数441点。

7. 年代—大木8b式併行

8. 特徴—HY25-HY41-HY1の構築が想定される。

住居番号【HY26】付図1

1. 平面形状・規模—楕円形状が推測される。長径は5.10m、短径は不明。

2. 切合関係—西側のHY27と重複している。プランやセクションではHY27が古い。

3. 壁の状況—ゆるやかに立上り、深さは15~20cmある。

4. 柱穴・床面—掘り下げた床面からは確認されなかった。床面は平坦である。

6. 出土遺物—凹石5点、磨石3点、石皿2点。土器片296点、剝片24点、総数330点。

7. 年代—大木8b式併行

住居番号【HY27】付図

1. 平面形状・規模—円形状を呈し、長径は5.00mと推測される。

2. 切合関係—東方がHY26と重複する。

3. 壁の状況—やや急勾配で立ち上がる。深さは15~20cmを有する。

4. 柱穴・床面—精査箇所からは確認できなかった。

5. 出土遺物—打製石斧1点、凹石1点、磨石3点。土器片143点、剝片20点、総数168点。

7. 年代—大木8b式併行

住居番号【HY28】第14図

1. 平面形状・規模—不整の橢丸方形を呈し、長径7.06m、短径6.80mを測る。

2. 切合関係—東方部がHY24と重複する。土器の吟味ではHY28が新しい。

3. 壁の状況—ゆるやかに立上る形態であり、深さは平均で20cmを有する。

4. 柱穴・床面—柱穴は5本認められる。床面は屢層で凹凸がある。土壌も3基ある。

5. 炉跡の状況—北方の壁近くにGY9とした地床炉が認められた。

6. 出土遺物—三脚石器1点、磨製石斧1点、石錐1点、三脚土製品1点、凹石14点、磨石8点、石皿5点。土器片1593点、剝片41点、総数1665点。

7. 年代—大木8b式併行

8. 特徴—調査区の最も西南部に位置する住居跡である。覆土に多量の礫を含む。

住居番号【HY29】第12図

1. 平面形状・規模—長円形状を呈し、現況で長さ3.26m、幅3.20mを測る。

2. 切合関係—HY24-HY29-HY21の重複関係が推測される。

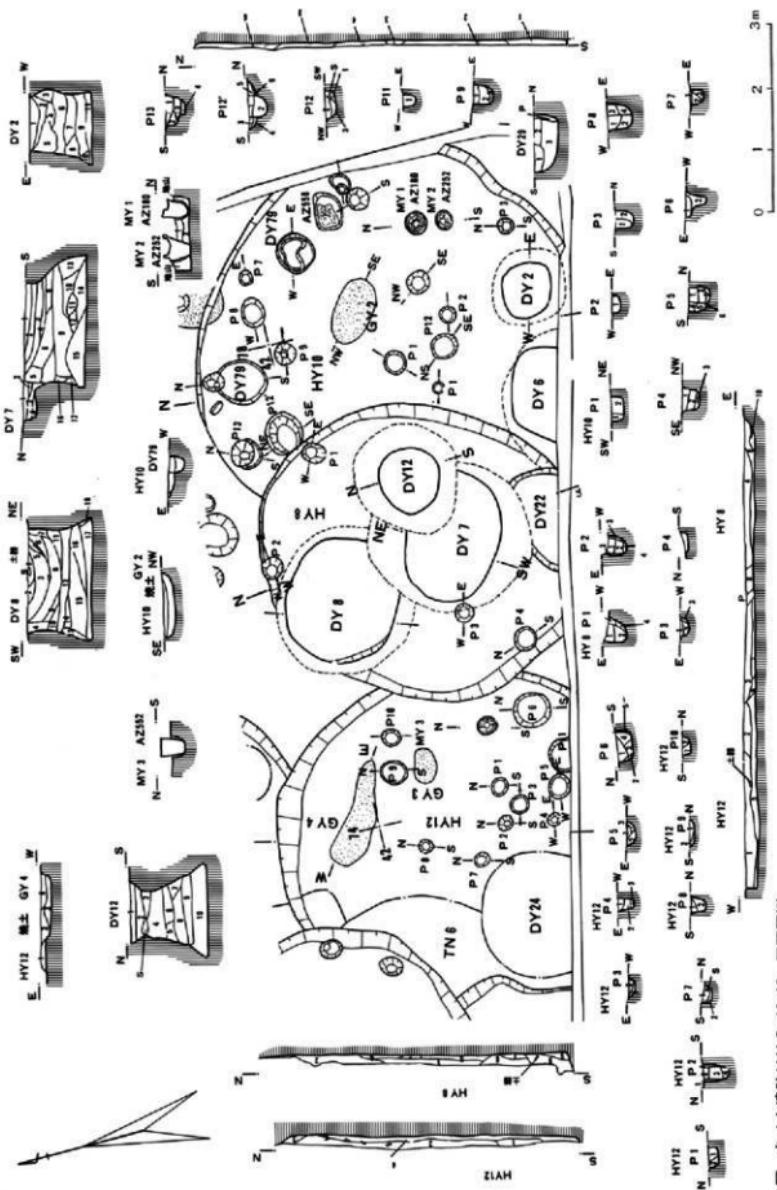
3. 壁の状況—ゆるやかに立上る形態であり、深さは10cmと浅い。

4. 柱穴・床面—柱穴は3本認められた。床面は平坦で堅い。

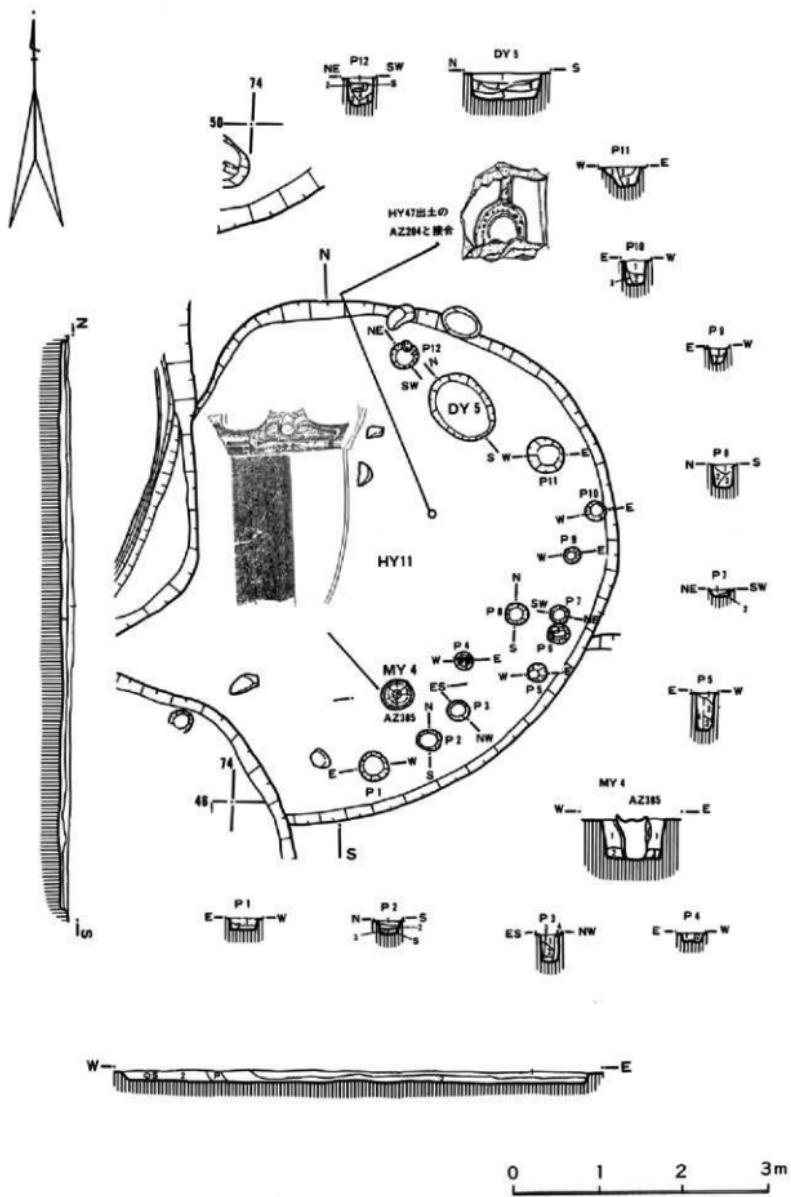
5. 炉跡の状況—精査面からは認められなかった。

6. 出土遺物—一括土器1点、石皿1点。土器片182点、剝片12点、総数196点。

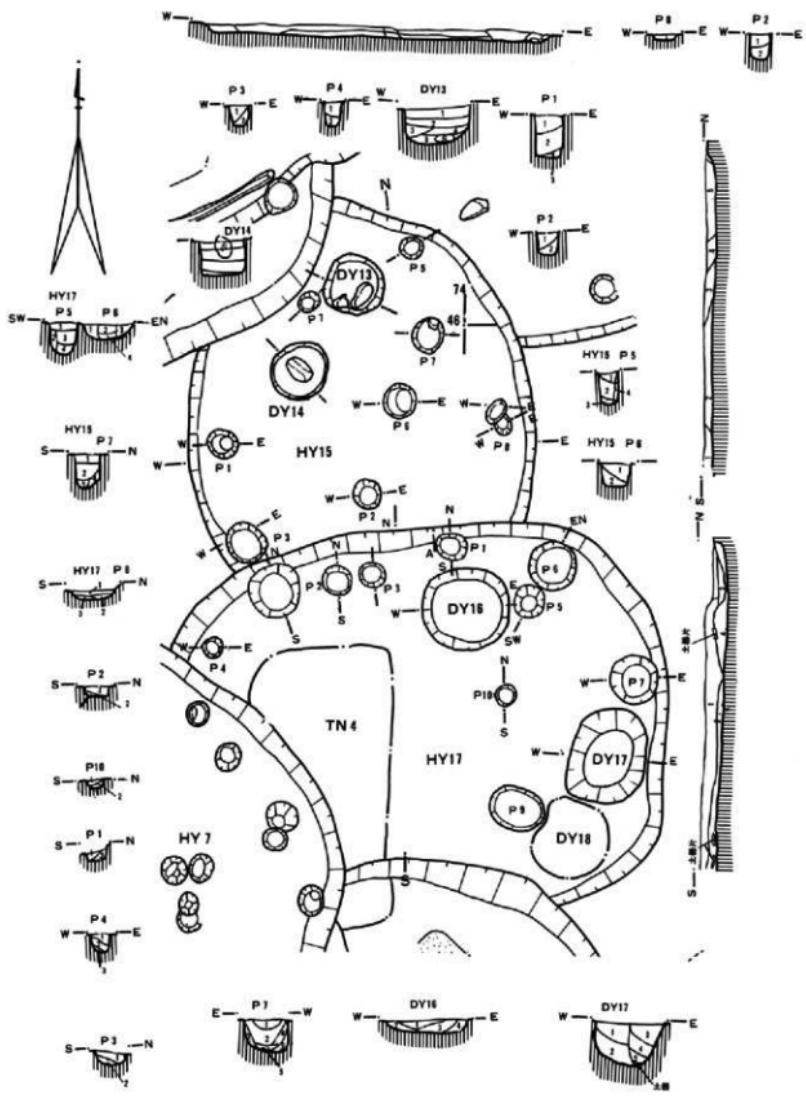
7. 年代—大木8b式併行



第9図 合ノ上地熱HY8-10-12 平面図(8)

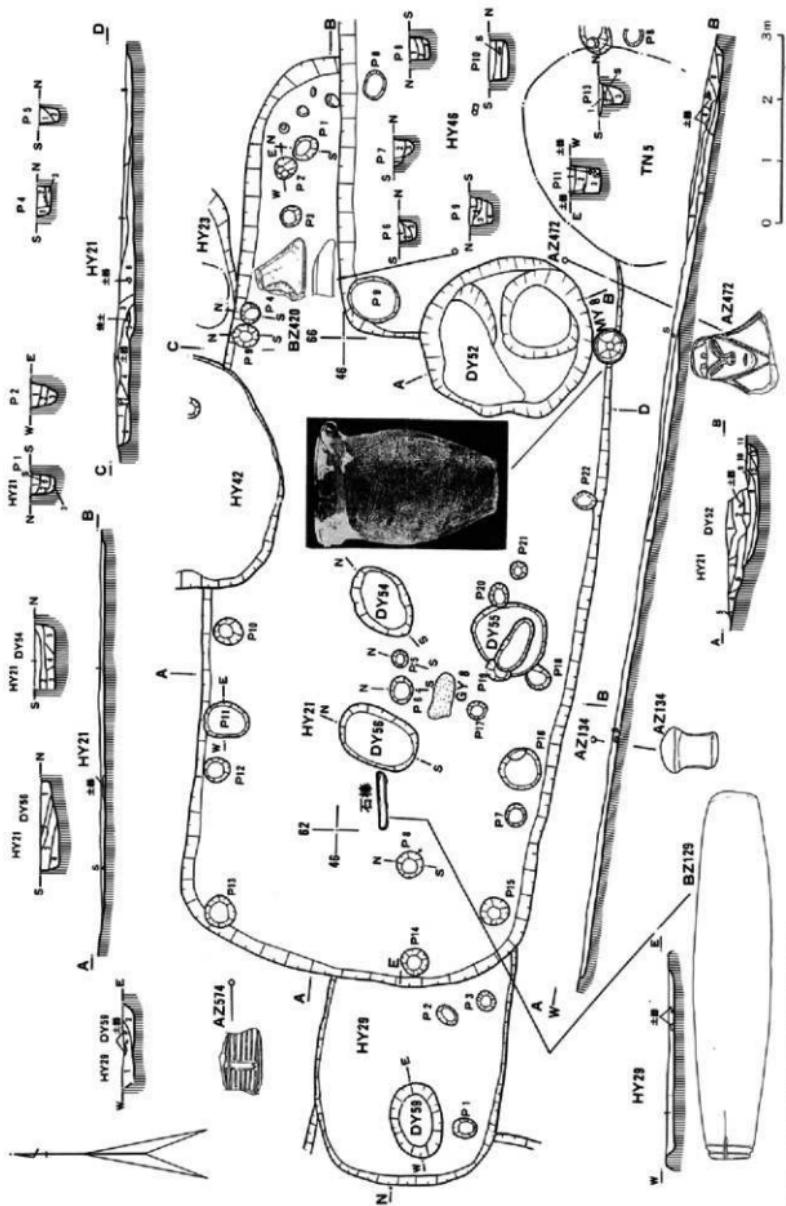


第10図 台ノ上遺跡H Y11 平面図(9)

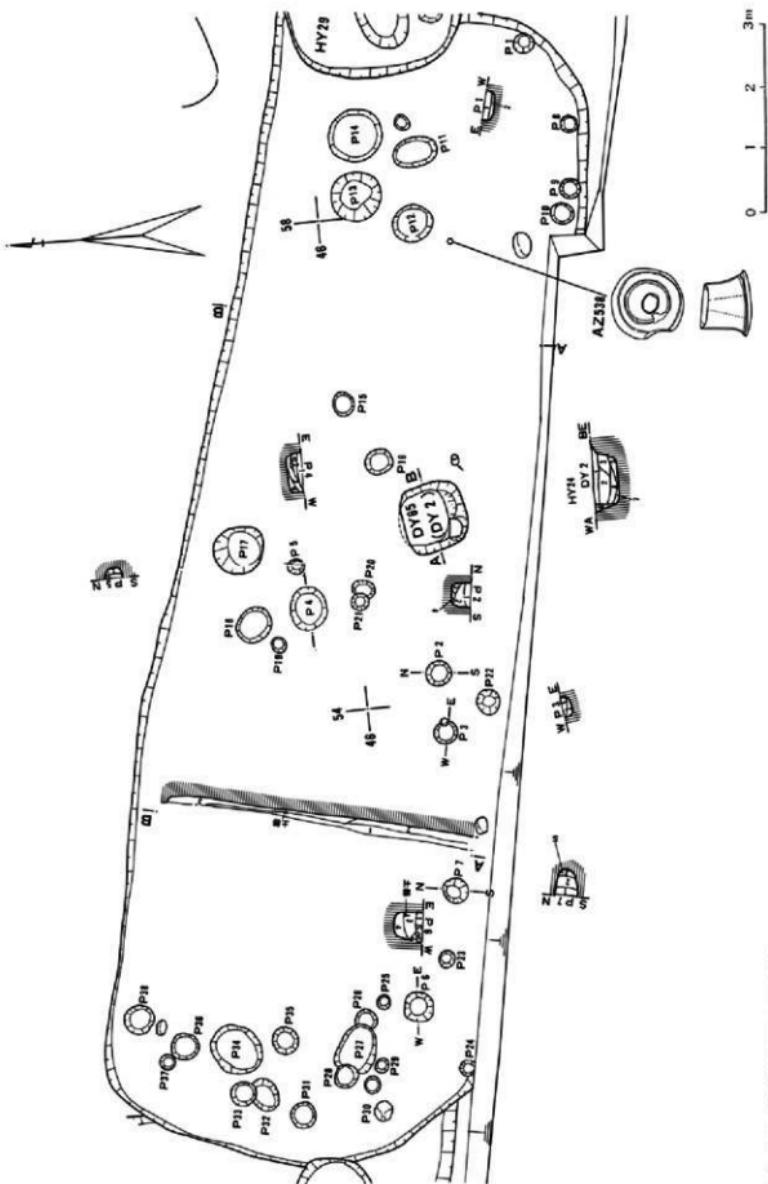


第11図 合ノ上道路HY15-17 平面図

0 1 2 3m



第12圖 台ノ上遺跡HY21-29 平面図(1)



第13圖 合ノ上遺跡HY24 平面圖(1)

8. 特 微一幅の狭い長円形状を有する竪穴住居跡と考えられる。

住居番号【HY30】 第19図

1. 平面形状・規模—北東に長軸を有する隅丸方形状を呈し、長さ7.60m、幅4.10m。

2. 切合関係—HY39、56—43—40—55—57—30の順と考えられる。HY30が最も古い。

3. 壁の状況—南東部の一部が残存するに過ぎない。ゆるやかに立ち上がる壁面である。

4. 柱穴・床面—PY161、159、158、154、162、152の6本で壁直下に配する。

5. 炉跡の状況—重複関係が複雑で明確判断できなかった。

6. 出土遺物—土器片221点、総数221点。

7. 年代—大木8b式併行

8. 特徴—HY30、49、55の3棟を構築した様相を呈す。地山はシルト質で水はけがよい。

住居番号【HY31】 第16図

1. 平面形状・規模—長軸を東西に有する方形状を呈する。長さ3.10m、幅2.50mを測る。

2. 切合関係—HY32によって東方部端が削平されている状況を呈する。

3. 壁の状況—やや急勾配に立ち上がる。深さは15cmを有する。

4. 柱穴・床面—土壤群によって削平された状況であり、1本しか発見できなかった。

5. 炉跡の状況—確認されなかった。

6. 出土遺物—土器片42点、剥片2点、総数44点。

7. 年代—大木8b式併行

8. 特徴—住居跡廃絶後に構築された土壤からは土偶が出土している。

住居番号【HY32】 第16図

1. 平面形状・規模—西方部が円形状、東方部が方形状を呈する。長さ9.50m、幅5.20m。

2. 切合関係—HY2によって南方部が削平されている。

3. 壁の状況—砂利面を掘って構築した住居跡で、壁面は崩れやすい。

4. 柱穴・床面—26本壁直下周辺に配する。いずれも40cm位で深い。

5. 炉跡の状況—ポール状の落ちこみを有するGY10、11の2基が認められた。

6. 出土遺物—磨製石斧1点、石鎌1点、スクレーパー2点、一括土器5点、土偶1点、

完形土器1点、石錐1点。剥片77点、総数89点。

7. 年代—大木8b式併行

8. 特徴—遺物の出土量が多い住居跡の一つに上げられる。東方に一部周溝を配する。

住居番号【HY33】 第25図

1. 平面形状・規模—円形状を呈すると考えられ、長径は5.00m前後と判断される。

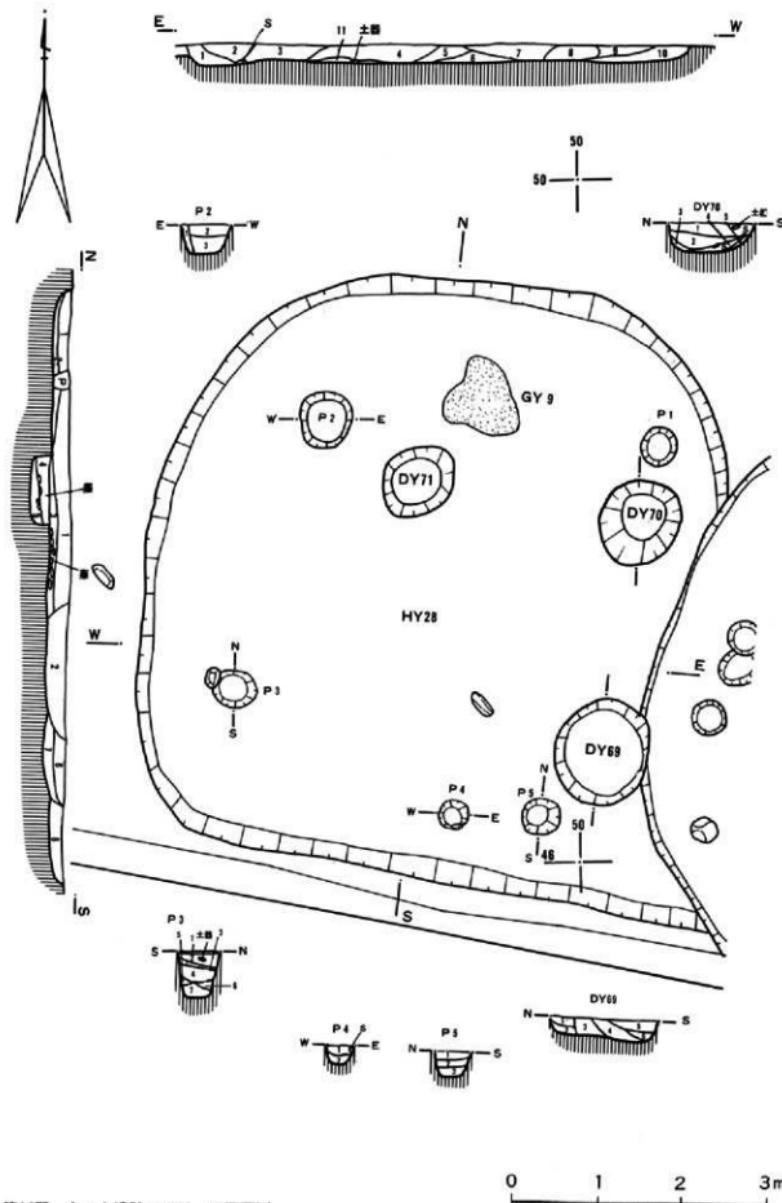
2. 切合関係—北方部をHY49によって削平されている。南方部は明確にできなかった。

3. 壁の状況—東方部だけ確認している。ゆるやかに立上り、深さは15cmある。

4. 柱穴・床面—PY118の1本だけ確認している。床面は平坦と推測される。

5. 炉跡の状況—DY101の構築によって、削平されたと考えられる。

6. 出土遺物—土器片276点、総数276点。



第14図 台ノ上遺跡HY28 平面図

7. 年代一大木8b式併行
8. 特徴—砂利面を掘り込んで構築した住居の一つである。廃絶後DY101を構築した。

住居番号【HY34】 付図

1. 平面形状・規模—6m四方の隅丸方形を呈する形態を推測する。
2. 切合関係—西方HY47、南方HY49、北方部HY45とそれぞれ重複する。
3. 壁の状況—東南部に一部残存し、ゆるやかに立上がる形態を有す。
4. 柱穴・床面—5本認められた。砂質で平坦な形態である。
5. 炉跡の状況—確認されなかった。
6. 出土遺物—スクレーパー1点、一括土器1点。土器片1437点、総数1439点。

7. 年代一大木8b式併行

8. 特徴—集中して住居跡が構築された場所にあり、最初に建てられた住居跡であろう。

住居番号【HY35】 付図

1. 平面形状・規模—長径が約4.60mの楕円形を呈すると推測される。
2. 切合関係—北東部に位置し、全体の四分の一一位しか精査していないので不明。
3. 壁の状況—ゆるやかに立上がる形態である。
6. 出土遺物—土器片460点、総数460点。

7. 年代一大木8b式併行

住居番号【HY36】 第17図

1. 平面形状・規模—方形形を呈すと推測されるが、全容は不明である。
2. 切合関係—西側に位置するHY48と隣接する。西北に壁が認められるが住居跡壁面であるかは把握できなかった。
4. 柱穴・床面—5本認められた。床面は砂質で凹凸がある。
5. 炉跡の状況—全体を精査していないので不明。
6. 出土遺物—土器片450点、総数450点。

7. 年代一大木8b式併行

8. 特徴—調査区の北東部に位置し、砂利層を掘り込んで構築している。

住居番号【HY37】 第15図

1. 平面形状・規模—楕円形を呈し、長径は5.30m、短径は4.00mを想定する。
2. 切合関係—HY38-37-51-45の構築順であろう。
3. 壁の状況—上面が耕作によって削平されており、明確でない。
4. 柱穴・床面—壁面や壁直下に6本を配する。床面はシルト質で平坦である。
5. 炉跡の状況—DY298の石組は精査の結果、住居跡に伴うものではない。
6. 出土遺物—スクレーパー1点、尖頭状石器1点、石皿1点。土器片2686点、剝片15点、総数2704点。
7. 年代一大木8b式併行
8. 特徴—床面の南方部中央に位置する土壤は、廃絶後に構築されたものである。

住居番号【HY38】 第15図

1. 平面形状・規模—不整円形状を呈し、長径4.30m、短径3.20mと推測される。
2. 切合関係—HY 60、51、37の3棟と重複している。
3. 壁の状況—HY 37、60と同様に浅い。それゆえ明確に言えない。
4. 柱穴・床面—東南箇所に集中して4本ある。床面は東から西へ若干傾斜する。
5. 出土遺物—石錐1点、土偶3点。土器片605点、剝片98点、総数707点。
7. 年代—大木8a式併行
8. 特徴—TN 8の窪穴状土壤によって、北西部が削平されている。

住居番号【HY 39】 第19図

1. 平面形状・規模—ほぼ円形状を呈すと推測され、長径は4.30m位か。
2. 切合関係—HY 39、56、43、40、55、57の廃絶後に構築された住居跡と考える。
3. 壁の状況—耕作によって削平され、明確にできなかった。
4. 柱穴・床面—10本認められる。床面は東から西へ若干傾斜している。
5. 炉跡の状況—E Y 2、3の土器埋設石組炉が発見されている。
6. 出土遺物—石錐1点、スクレーパー1点。土器片243点、剝片272点、総数517点。
7. 年代—大木8b式併行
8. 特徴—隣接して、2基の土器埋設石組炉をもつ住居跡である。

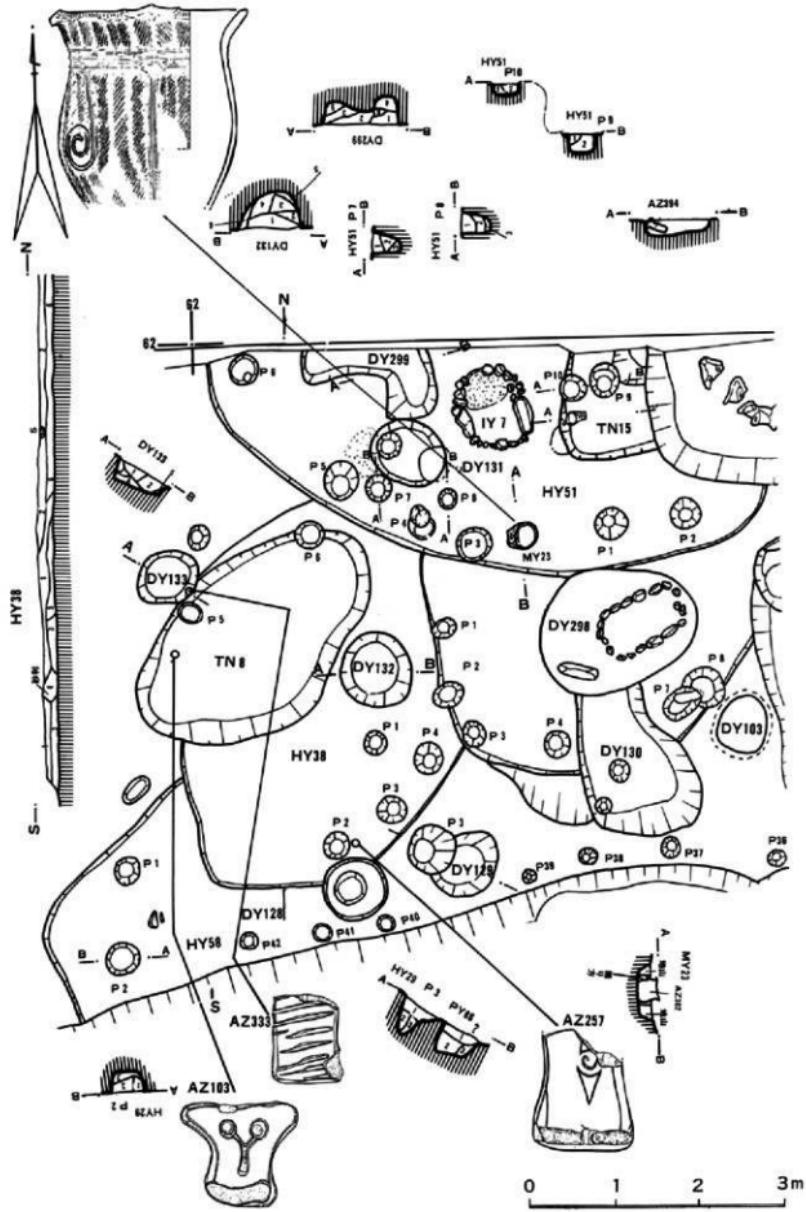
住居番号【HY 40】 第19図

1. 平面形状・規模—長軸が北方方向を呈す長方形形状で、長さ6.30m、幅3.30mを測る。
2. 切合関係—HY 30の廃絶後に構築した住居跡であろう。複雑に重複している。
3. 壁の状況—南東コーナー一部が残存している。壁面が約45度の角度を有する。
4. 柱穴・床面—PY 178、166、162、168、175等が想定される。平坦な床面である。
5. 炉跡の状況—明確に把握できなかった。
6. 出土遺物—石錐1点、括土器3点、三角型土製品1点、砥石1点。土器片400点、剝片427点、総数833点。 7. 年代—大木8b式併行
8. 特徴—壁面直下に周溝を有する住居跡。床面の状況から全周しないと推測する。

住居番号【HY 41】 第18図

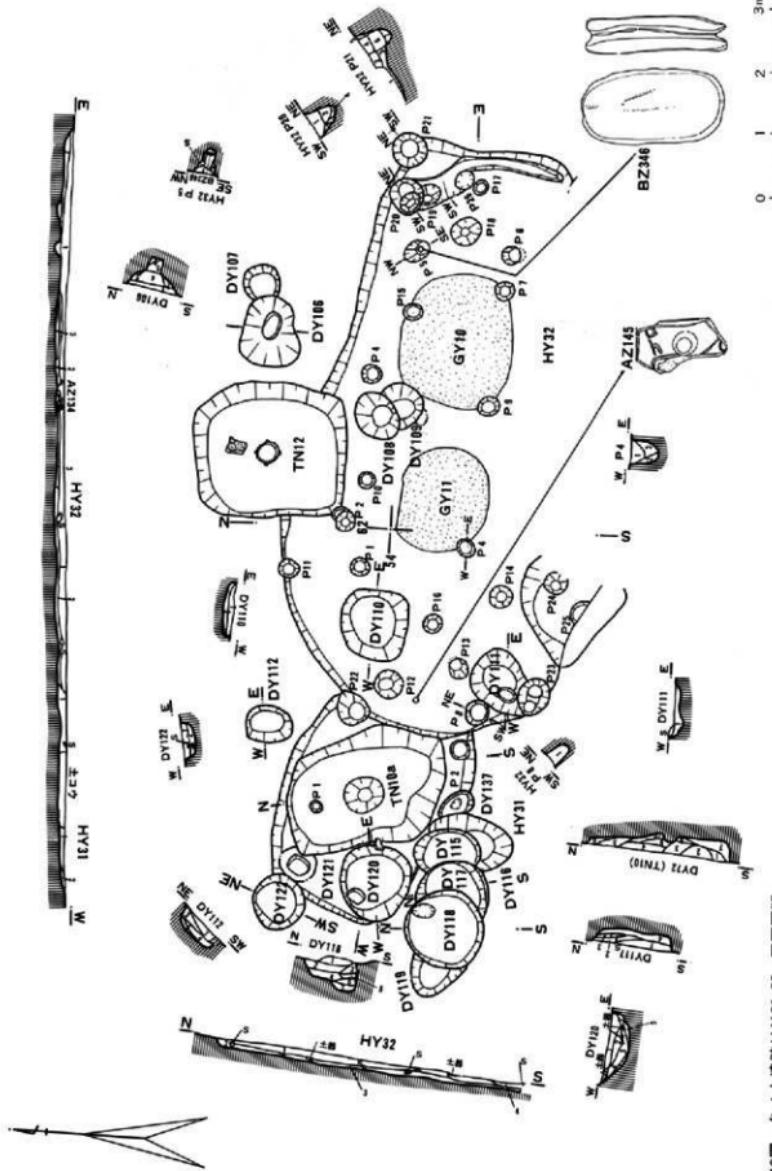
1. 平面形状・規模—長軸が北東方向を示し、卵型を呈す。8.20m × 6.50mを測る。
2. 切合関係—掘り方が深いことからHY 1を削平したように見えるが、HY 1が新しい。
3. 壁の状況—約45度の傾斜で立ち上がる。40~60cmと深い壁面を有する。
4. 柱穴・床面—13本を配すと考えられる。一点破線の箇所が貼り床である。
5. 炉跡の状況—長軸方向に沿って、中央部に位置する。石組内部に土器片を配する。
6. 出土遺物—磨製石斧1点、打製石斧1点、スクレーパー3点、石錐1点、凹石7点、磨石6点、石皿2点。土器片1231点、剝片88点、総数1340点。
7. 年代—大木8b式併行
8. 特徴—貼り床、周溝、土器を敷き詰めた炉跡を有する住居跡である。

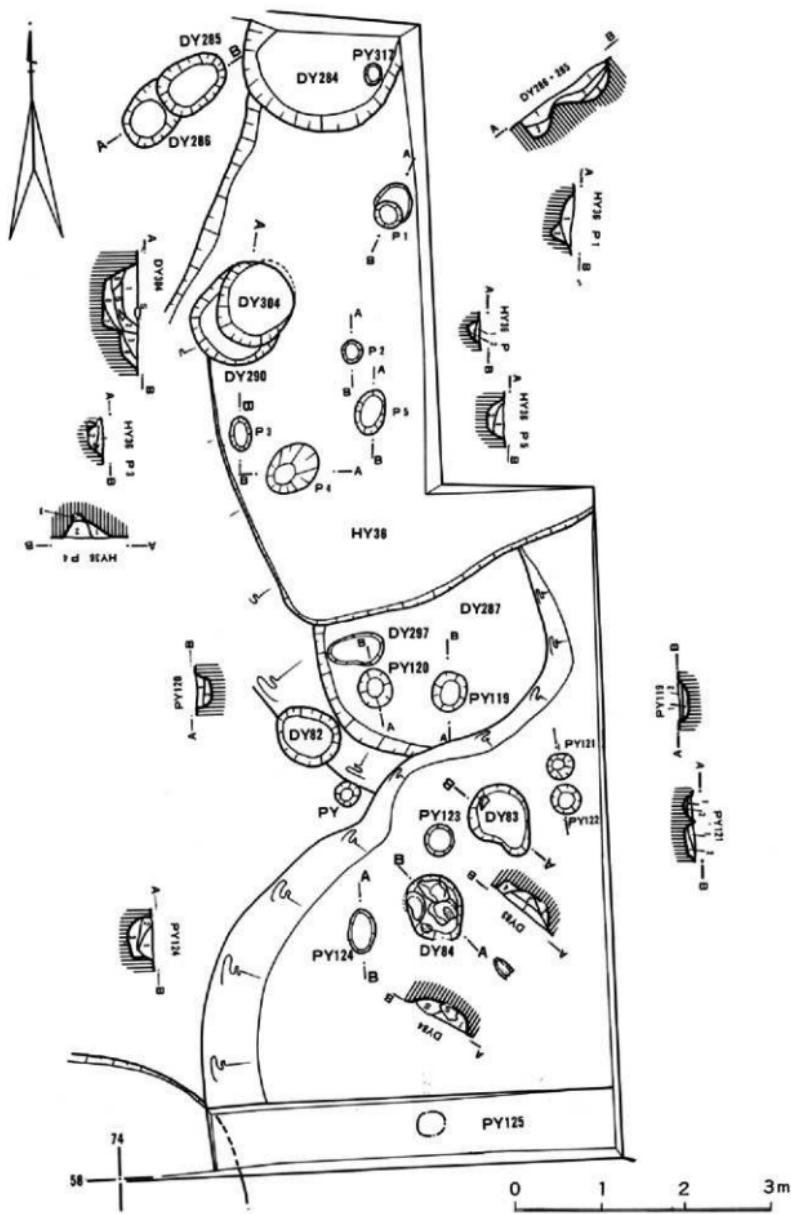
住居番号【HY 42】 第4図



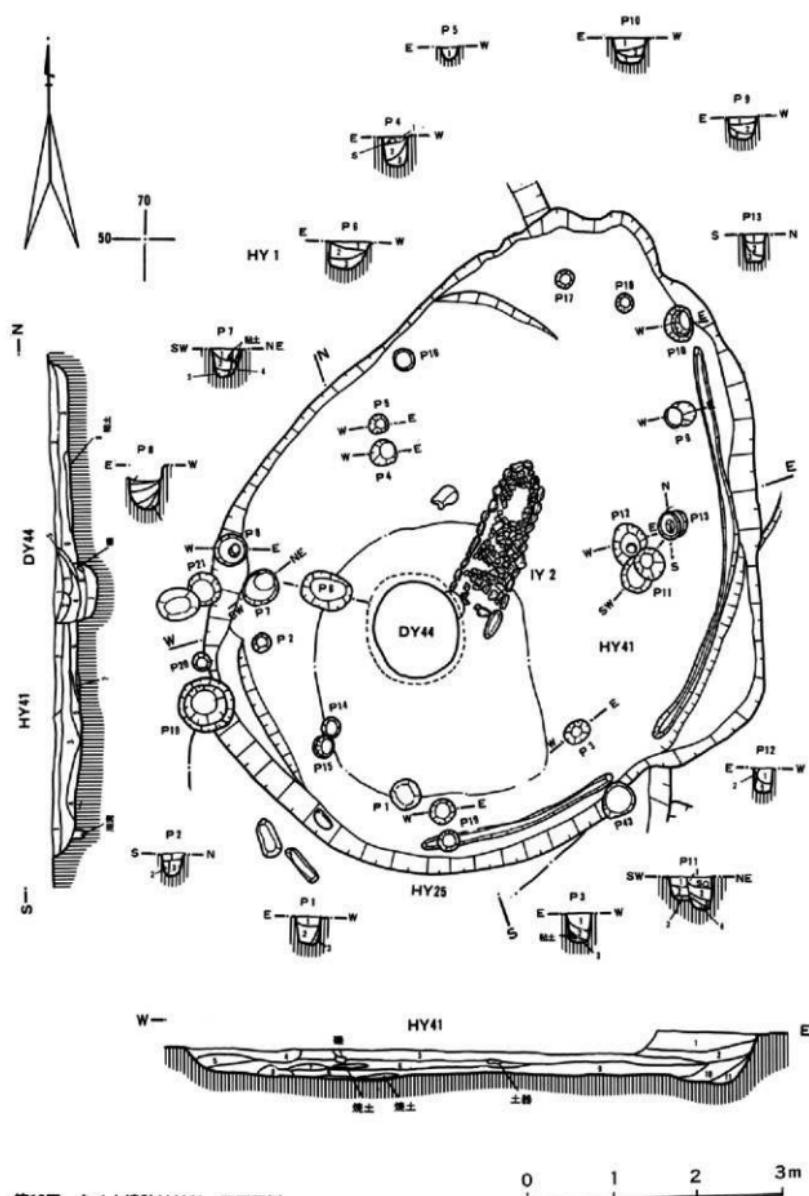
第15図 台ノ上遺跡HY29-37-38-51 平面図(14)

第16圖 台ノ上遺跡HY31-32 平面図(1)





第17図 台ノ上遺跡HY36 平面図(1)



第18図 台ノ上遺跡HY41 平面図①

1. 平面形状・規模—隅丸方形状を呈し、長径4.20m、短径3.90mを測る。
2. 切合関係—HY23—21—42の重複関係とする。3棟と大木8b式併行の住居跡である。
3. 壁の状況—ゆるやかに立上がる壁面を有す。
4. 柱穴・床面—5本を配す。東から西へ若干傾斜しているもののほぼ平坦である。
5. 炉跡の状況—確認されなかった。
6. 出土遺物—凹石1点、磨石1点。土器片372点、剥片8点、総数385点。
7. 年代—大木8b式併行
8. 特徴—微小規模な竪穴住居跡である。大型の住居跡に比べると遺物出土量も少ない。

住居番号【HY43】 第20図

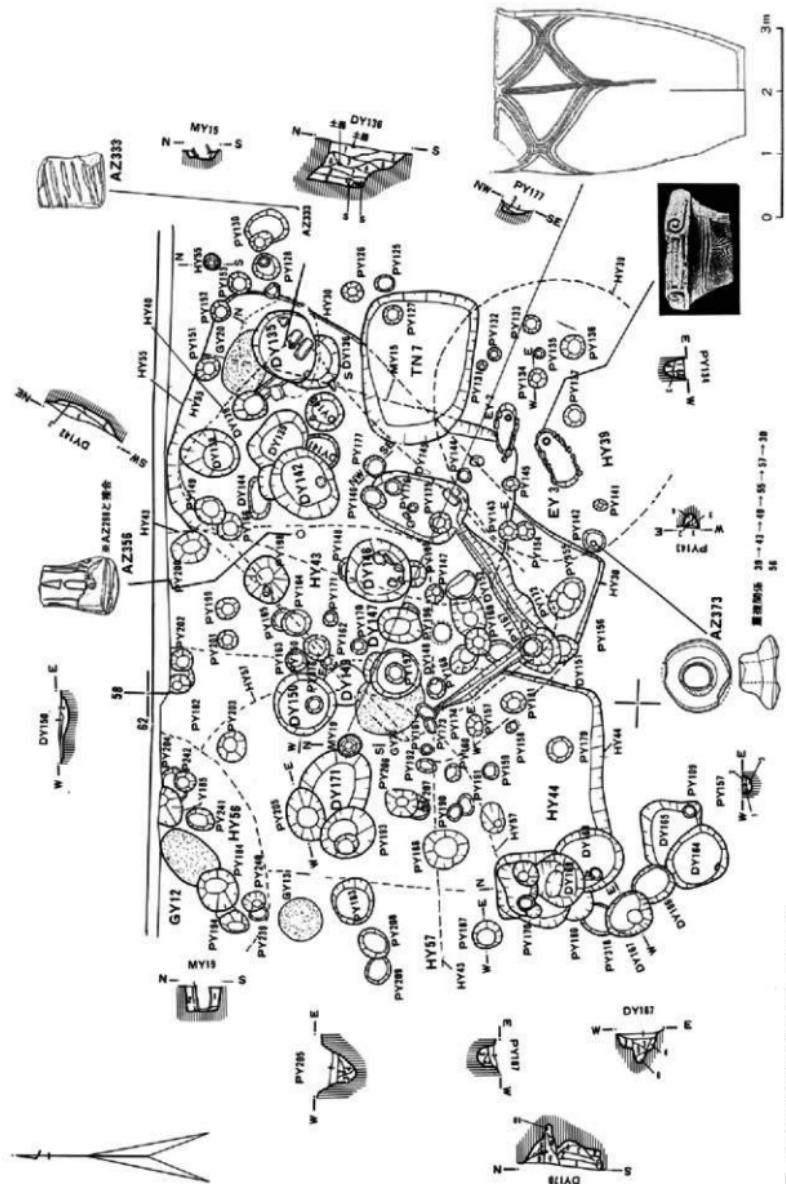
1. 平面形状・規模—長方形形状を呈す大型住居跡で、長さは18.30m、幅は4.20mを測る。
2. 切合関係—北側は不明であるが、東側は8棟の住居跡と複雑に重複する状況である。
3. 壁の状況—西南コーナー部が残存する。ゆるやかに傾斜する壁面の形態である。
4. 柱穴・床面—PY184等の大型の柱穴とPY231のように支柱がある。ほぼ平坦。
5. 炉跡の状況—GY17、19、18、12、13、22が認められた。
6. 出土遺物—磨製石斧2点、打製石斧1点、スクレーパー10点、一括土器4点、土偶4点、円盤型土製品1点、石匙3点、三角型土製品2点、黒曜石1点、その他土製品1点。土器片2536点、剥片2774点、総数5339点。
7. 年代—大木8a式併行の大型住居跡である。
8. 特徴—HY1より先行する大型住居跡として注目される。大型の土偶が出土した。

住居番号【HY44】 第20図

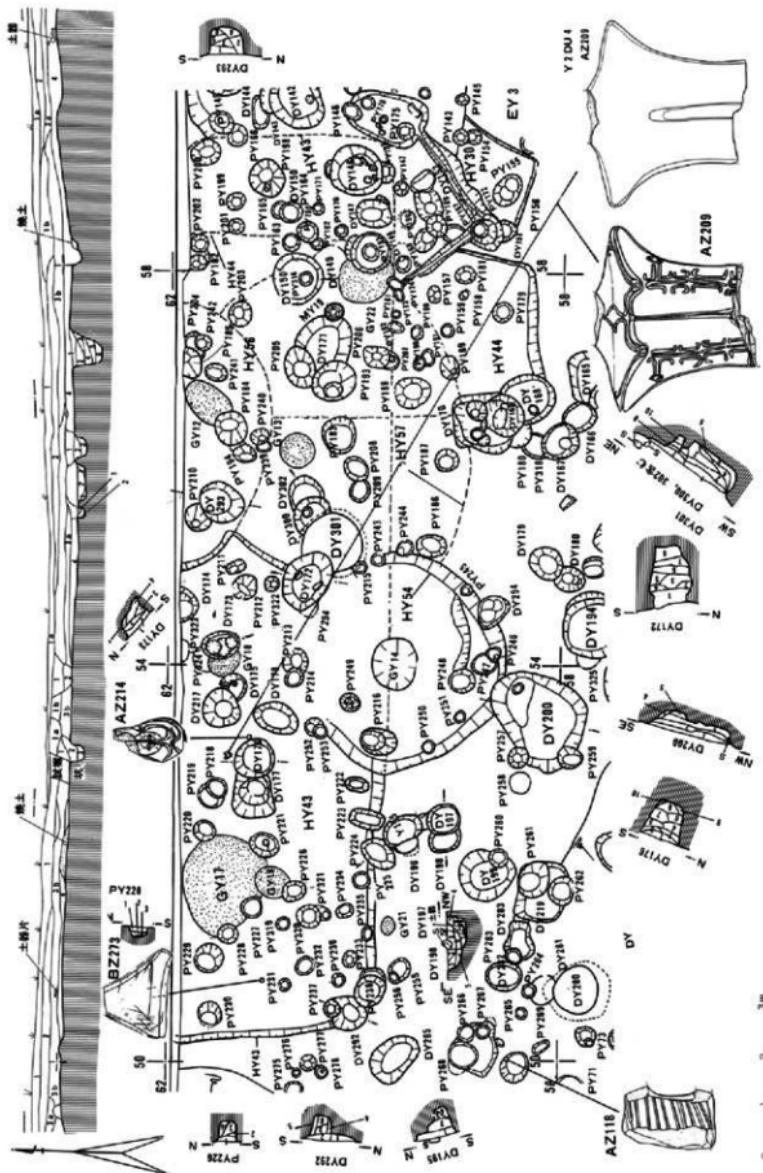
1. 平面形状・規模—長軸を南北に有する長方形である。長さ不明、幅は3.40mを測る。
2. 切合関係—円形状のHY56、57よりも先行する形状と考えたい。
3. 壁の状況—南東コーナー部が残存する。ゆるやかに立ち上がる壁面形態である。
4. 柱穴・床面—壁直下周辺に小規模な柱穴を配する。
5. 炉跡の状況—GY12、22が床面に認められるが、HY44に伴うものではないと考える。
6. 出土遺物—打製石斧1点、石錐1点、埋設土器1点、円盤型土製品1点、石匙1点、小型土器1点。土器片290点、剥片310点、総数606点。
7. 年代—大木8b式併行
8. 特徴—南北に長軸を有す大型住居跡と推測されるが、重複関係が著しく全容は不明。

住居番号【HY45】 第21図

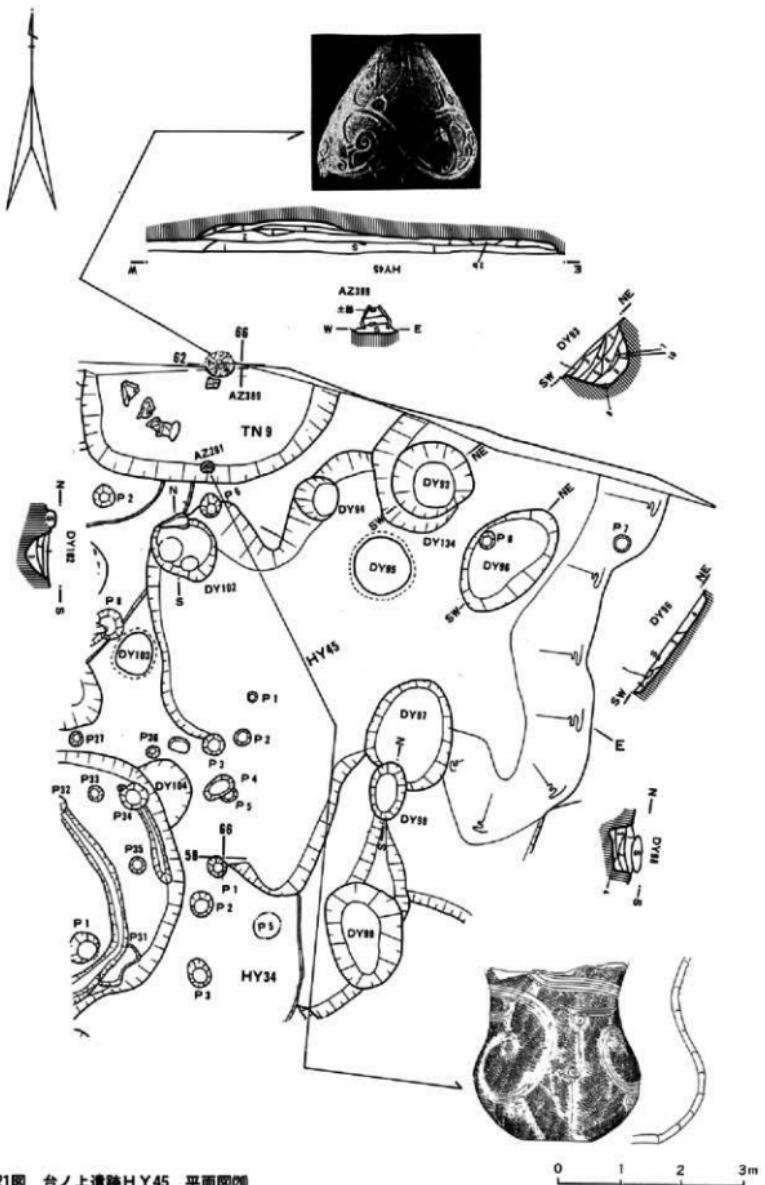
1. 平面形状・規模—重複関係が著しく、全容は不明と言わざるを得ない。
2. 切合関係—HY34、47が重複しさらにDY102、93~96の5基が認められる。
3. 壁の状況—西側に認められる。東側は自然斜面である。
4. 柱穴・床面—小規模な柱穴が6本、南西箇所に確認された。床面は平坦である。
5. 炉跡の状況—認められなかった。
6. 出土遺物—磨製石斧2点、石錐1点、スクレーパー1点、石錐1点。土器片3602点。



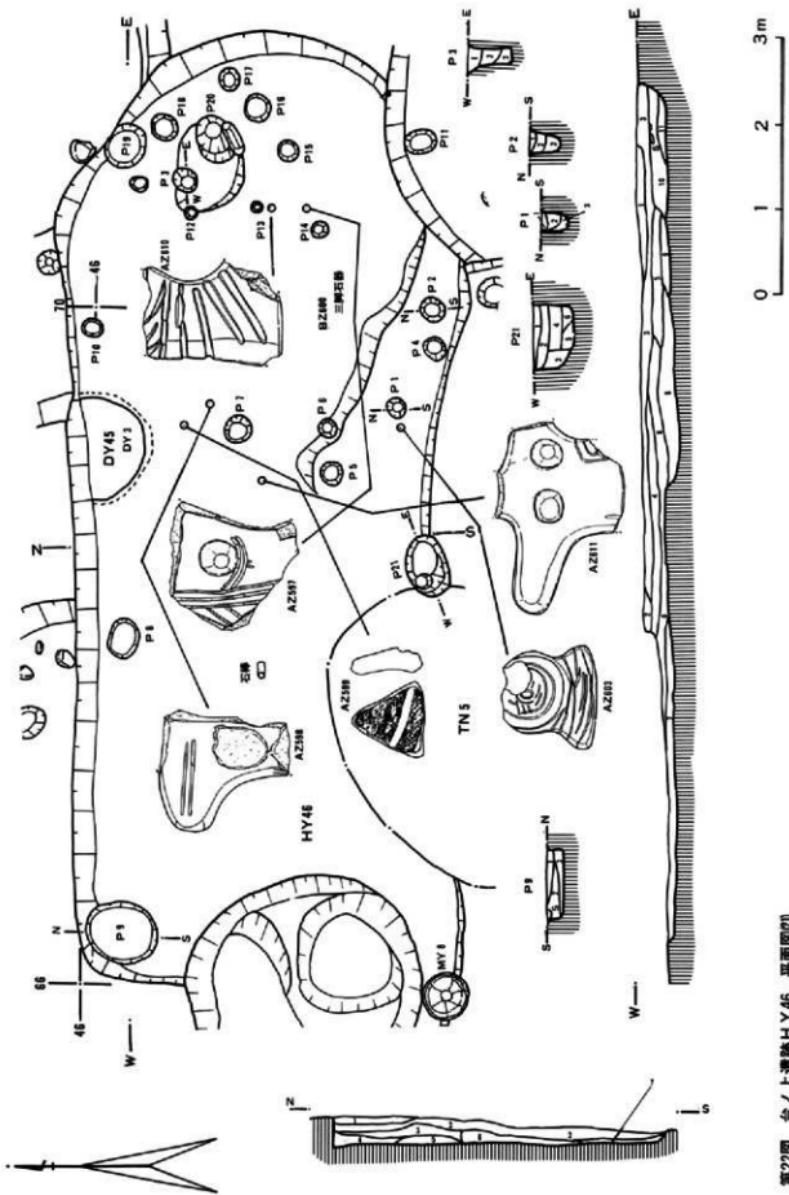
第19回 台ノ上遺跡H Y43-44地 平面図(1)



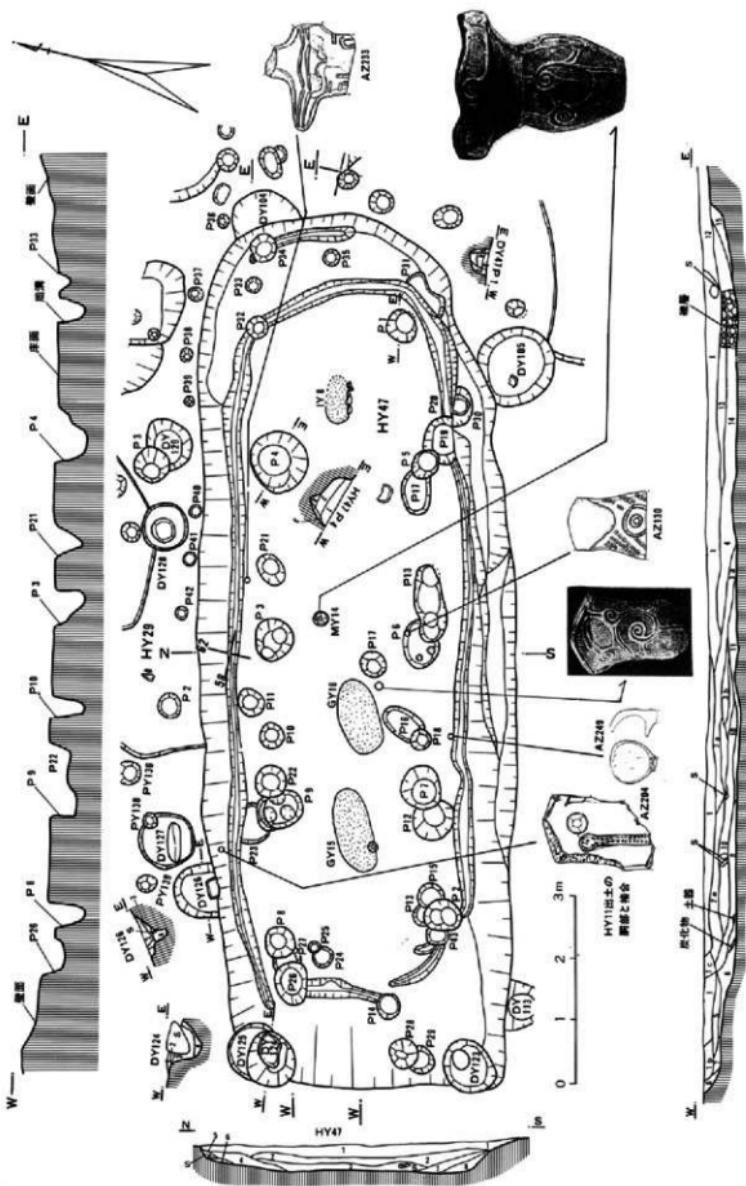
第20図 合ノ上遺跡H Y43-54 平面図(9)



第21図 台ノ上遺跡HY45 平面図④



第22図 台ノ上温泉HY46 平面図(2)



第23図 古ノ上遺跡HY47 平面図(2)

剥片71点、総数3678点。 7. 年 代一大木8 b式併行

8. 特 微-HY45以外にも住居跡の痕跡が認められるが、明確にはできなかった。

住居番号【HY46】 第22図

1. 平面形状・規模—西側が方形で東側が円形状を呈する。長さ11.20m、幅4.80m。
2. 切合関係—当初東側に円形状の住居跡があり、西へ拡張した状況を呈する。
3. 壁の状況—東側は直角に近く、西側はゆっくり立ち上がる。
4. 柱穴・床面—東側に集中する。西側の北部コーナー部に大型の柱穴が認められる。
5. 炉跡の状況—P13周辺から炭化物が出土している。地床炉と考えられる。
6. 出土遺物—三脚石器3点、石鏃1点、スクレーパー3点、石錐3点、土偶5点、円盤型土製品1点、石匙2点、三角型土製品1点。凹石18点、磨石10点、石皿8点。土器片190点、剥片207点、総数452点。 7. 年 代一大木8 b式併行
8. 特 微—土偶や三角型土製品が出土している。また南西コーナー部にMY8が認められる。

住居番号【HY47】 第23図

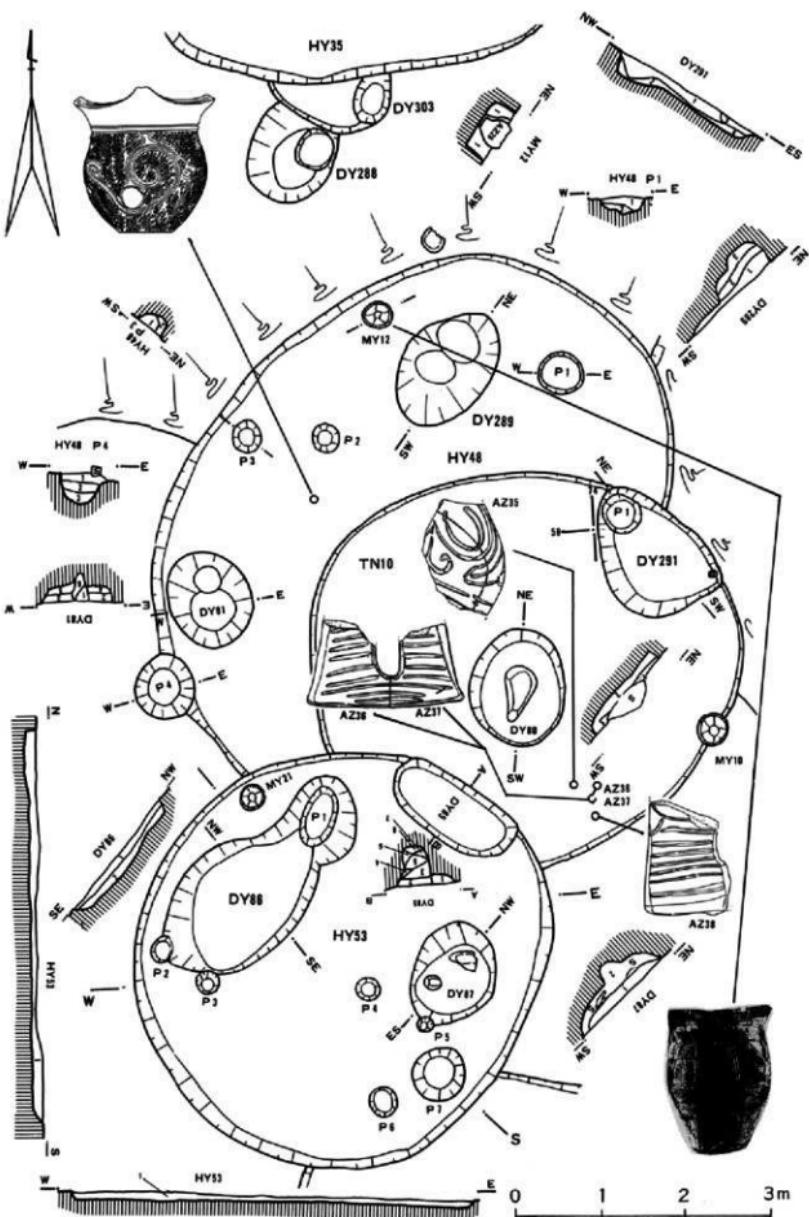
1. 平面形状・規模—長方形形状で西方は方形に、東方は円形状を呈す。14.30m×5.20m。
2. 切合関係—平面形状の確認から、周辺の住居跡を削平して構築した様相を呈する。
3. 壁の状況—壁面が砂利なので崩れています。本来は急斜面であろう。
4. 柱穴・床面—床面と壁の上場に配している。床面は平坦で堅い。
5. 炉跡の状況—地床炉2基、石組炉1基の合計3基が中央部に配置されている。
6. 出土遺物—三脚石器1点、磨製石斧5点、打製石斧11点、石鏃5点、スクレーパー15点、石錐5点、一括土器3点、土偶3点、石匙2点、尖頭状石器1点、完形土器1点、半完形土器2点、三角型土製品1点、釣針1点、埋設土器1点、円盤型土製品2点。土器片8536点、剥片342点、総数8937点。 7. 年 代一大木8 b式併行
8. 特 微—周溝が全周する方形状の大型住居跡であり、掘り方も50cmと深い。

住居番号【HY48】 第24図

1. 平面形状・規模—楕円形状を有し、長径6.80m、短径4.60mを測る。
2. 切合関係—南東箇所をTN106、HY53によって削平を受けている。
3. 壁の状況—砂利面を掘り込んで構築しており、壁面は10cm位しかない。
4. 柱穴・床面—4本認められる。床面は砂利に覆われ、凹凸がある。
5. 炉跡の状況—確認されなかった。
6. 出土遺物—石皿1点。土器片926点、剥片9点、総数936点。
7. 年 代一大木8 b式併行
8. 特 徴—北方部の壁直下にMY12の埋設土器がある。この深鉢形土器は大木8 a式併行である。

住居番号【HY49】 第25図

1. 平面形状・規模—隅丸方形形状を呈し、長径4.80m、短径3.80mを測る。



第24図 台ノ上遺跡H Y48-53 平面図(2)

- 切合関係—HY33、34と重複している。両方共、大木8b式併行である。
- 壁の状況—東側が2段になっている。壁の上場には大木8b式併行のMY20がある。
- 柱穴・床面—5本認められる。床面は中央部がやや凹形態を有する。
- 炉跡の状況—確認されなかった。
- 出土遺物—磨製石斧2点、打製石斧1点、石鏃1点、スクレーパー1点、一括土器3点、土偶2点、石匙1点、三角型土製品1点。土器片514点、剝片49点、総数564点。
- 年代—大木8a式併行
- 特徴—土偶や三脚石製品が出土した箇所は土器片も集中しており、祭祀を連想する。

住居番号【HY50】 第26図

- 平面形状・規模—ほぼ円形状を呈し、長径5.60mを測る。
- 切合関係—北西部が重複しているが、全容は明確にできた。
- 壁の状況—砂利層を掘り込んで構築した住居跡であり、壁面10cm未満である。
- 柱穴・床面—拡張した痕跡があり、柱穴は24本ある。床面は中央部がやや低い。
- 炉跡の状況—中央部に小礫を使用した長円形の石組炉がある。長軸は南北を示す。
- 出土遺物—磨製石斧1点、打製石斧2点、石鏃1点、土偶3点。土器片51点、剝片12点、総数70点。
- 年代—大木8b式併行
- 特徴—周溝を配した住居を構築後、南方部を除く箇所を拡張した住居跡である。

住居番号【HY51】 第15図

- 平面形状・規模—楕円形状を呈す形態と推測される。現況で6.80mを測る。
- 切合関係—HY37、38と重複している。廃絶後、土壤構築による削平を受けている。
- 壁の状況—ゆるやかに立上り、浅い。平均10cm未満である。
- 柱穴・床面—壁周辺に配する。床面は平坦で、MY23が出土している。
- 出土遺物—三脚石器1点、磨製石斧3点、打製石斧4点、スクレーパー5点、一括土器1点、埋設土器1点。土器片928点、剝片79点、総数1022点。
- 年代—大木8b式併行
- 特徴—石組炉を有する住居跡であり、HY6、4、50、51が環状に並ぶ様相を呈す。

住居番号【HY52】 第27図

- 平面形状・規模—楕円形状を呈し、長径4.00m、短径3.30mを測る。
- 切合関係—南西箇所をHY1によって削平されている。
- 壁の状況—ゆるやかに立上る状況を呈する。
- 柱穴・床面—7本の柱穴が認められ、床面は東から西へ若干傾斜している。
- 炉跡の状況—確認されなかった。
- 出土遺物—三脚石器1点。土器片703点、剝片31点、総数735点。
- 年代—大木7b式併行
- 特徴—小規模な竪穴住居跡である。同時期の住居跡は他に4棟ある。

住居番号【HY53】 第24図

1. 平面形状・規模—円形状を呈し、長径は4.70mを測る。
2. 切合関係—北東部に位置するHY48、TN10と重複する。
3. 壁の状況—浅い形態で、壁面はゆるやかに立上がる。
4. 柱穴・床面—5本認められる。床面は砂利層なので凹凸している。
5. 炉跡の状況—確認されなかった。
6. 出土遺物—磨製石斧1点、スクレーパー2点、一括土器1点、三角型土製品1点。土器片1440点、剝片94点、总数1539点。 7. 年代—大木8a式併行
8. 特徴—炉跡をもたない住居跡であり、HY18、17等と同時期に位置付けられる。

住居番号【HY54】 第20図

1. 平面形状・規模—円形状を呈する。長径4.30mを測る。
2. 切合関係—HY43、57と重複する。
3. 壁の状況—ゆるやかに立上がる壁面である。北部はHY43に削平され消滅している。
4. 柱穴・床面—壁直下に配する形態であり、12本認められる。床面は中央部が凹む。
5. 炉跡の状況—中央にG Y14とした地床炉がある。焼床からは炭化物が出土している。
6. 出土遺物—磨製石斧1点、打製石斧2点、スクレーパー2点、石匙1点。土器片134点、剝片37点、总数177点。 7. 年代—大木7b式併行
8. 特徴—住居出土の一括土器で唯一復元できた、大木7b式併行の土器を出土。

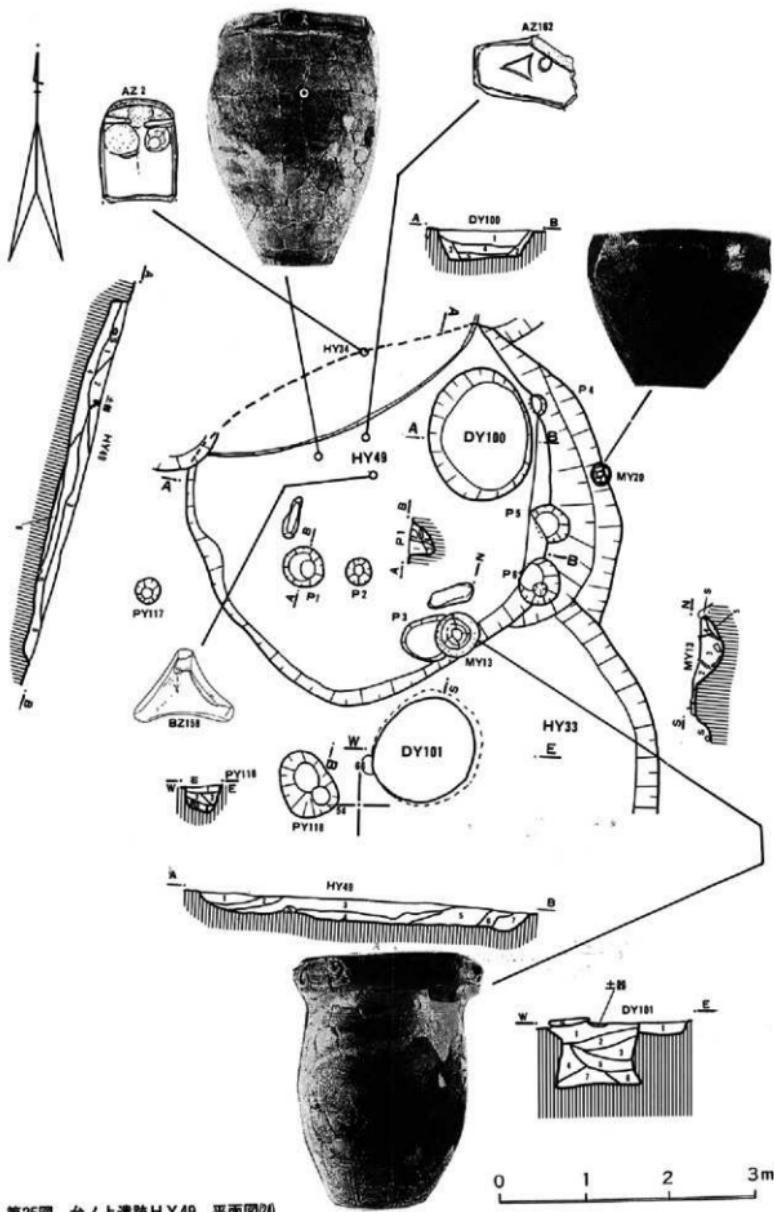
住居番号【HY55】 第19図

1. 平面形状・規模—隅丸方形形状を呈する。長さ6.20m、幅2.70mを測る。
2. 切合関係—HY40、30、39と重複する。土器の吟味から言えば最古の住居跡となる。
3. 壁の状況—東南部に一部が残存する。ゆるやかに立ち上がる形態である。
4. 柱穴・床面—壁直下に配すと推測されるが、明確に把握できなかった。床面も不明。
5. 炉跡の状況—土壇が構築されており、不明である。
6. 出土遺物—スクレーパー1点、凹石1点。剝片10点、总数12点。
7. 年代—大木7b式併行
8. 特徴—長軸方向が北東を示す形態である。

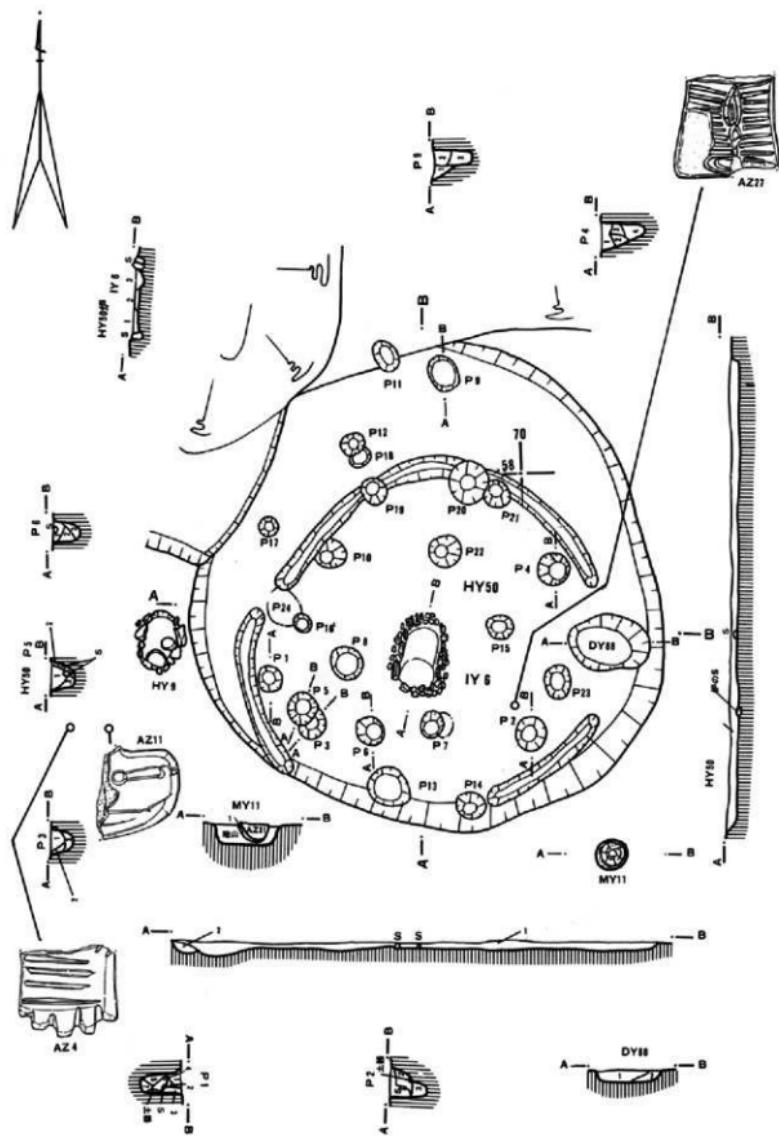
住居番号【HY56】

1. 平面形状・規模—円形状を呈す形と推測される。長径は5.40mを測る。
2. 切合関係—HY43、57の2棟と重複する。全体の3分の1を精査した現況である。
3. 壁の状況—西側に一部残存している。HY56、57の重複関係は明確にできなかった。
4. 柱穴・床面—7本認められるが、HY57の柱穴も含まれると考えられる。
5. 炉跡の状況—G Y12の地床炉は確認されている。
6. 出土遺物—土器片81点、总数81点。
7. 年代—大木8b式併行
8. 特徴—全体的に精査していないが、北方に延びることは確実である。

住居番号【HY57】 第19図



第25図 台ノ上遺跡HY49 平面図24



第26図 台ノ上遺跡HY50 平面図(2)

0 1 2 3m

1. 平面形状・規模—円形状を呈する。長径は5.70mを測る。
2. 切合関係—HY56、54、44、30、43の5棟と重複した状況を呈する。
3. 壁の状況—西北部の一部が残存するに過ぎない。壁面はやや急勾配に立ち上がる。
4. 柱穴・床面—壁直下周辺に配する形態で6本認められる。南から北へ若干傾斜する。
5. 炉跡の状況—GY13が認められるがHY57に伴うかは断定できない。
6. 出土遺物—剝片7点、总数7点。
7. 年代—大木8b式併行
8. 特徴—石組炉を持たない整穴住居跡であろう。

住居番号〔HY58〕 第15図

1. 平面形状・規模—方形形状を呈するものと考えられる。その他は不明。
2. 切合関係—HY47、38と重複する。
3. 壁の状況—ゆるやかに立上る。10cm位と浅い。
4. 柱穴・床面—2本認められる。第15図のP36～P42はHY47に付随する柱穴である。
5. 出土遺物—土器片276点、总数276点。
7. 年代—大木8b式併行
8. 特徴—南側をHY47によって削平され、全容は不明である。

2. 土壙〔第28図～第31図〕

○土壙の概要と分類

平面形状は、円形状と方形形状の2形態が認められる。掘り込みの深さは、20cm前後の浅いものから1m以上の深いものがあるが、平均すると50～60cm前後が多い。深い形態はフラスコ状の土壙に多く、東南部と北西部に集中分布する。これらの土壙群は、大半が住居跡床面や壁面を掘り込んでおり、住居跡と重複して検出された。このような土壙群の検出状況や出土遺物などから、方形形状の大型土壙をA1類、長円形状タイプをA2類、長方形形状タイプをA3類、円形状でフラスコ状の掘り方のタイプをB1類、円形で整穴状の掘り込みタイプをB2類、円形でボール状の掘り込みタイプをB3類とした3形態、土壙上面に礫を配すタイプをC1類、土壙上面に石組を配すタイプをC2類、土壙上面に土器を配すタイプをC3類とした3形態の計9形態に細類して述べる。

○A1類〔TN7～13〕

HY47周辺を取り囲むように5基、HY2北東部に1基、HY53北東に1基の計7基が認められる。この土壙群の特徴は、土偶や一括土器、石棒等の祭祀に関連した出土遺物で、TN12は土器口縁部を中心で埋納した状況、TN11は石棒と大型凹石がセットで出土した。

○A2類〔DY65、85、86、142、145、165、170、172、194、210、220、233、234、244、251、257、265、〕

調査区の西南部に集中した土壙群であり、砂利層を掘り込んで構築している状況を呈する。遺物は、DY177以外はほとんど含まない人工堆積の覆土であった。

○A3類〔TN1、2、4〕

南方部に3基認められ、TN1とした1基を掘り下げた。自然堆積状況を呈する黒褐色

の覆土であり、遺物は磨滅した土器の小破片が数点であった。深さは1m前後を有し、底面は東から西へ傾斜している。周辺にピットなどは確認されなかった。

○B 1類 [DY 2, 6~8, 21, 22, 44, 95, 135, 280, 301]

南東部に6基、東から西へ約8m間隔で一列に点在して検出された。東南部の市道箇所からも、同様な土壙が平成3年度の調査で検出している。DY 8からは一括土器等34図29が上面覆土より出土。東南部の土壙群の底面は平坦で、粘土が敷き詰められていた。

○B 2類 [DY 4, 5, 9, 11, 15~17, 20, 21, 23~44, 45~79, 82~84, 87~92, 106, 116~120, 122, 123, 125, 129~134, 136~144, 146~158, 160~164, 166~169, 173~193, 196~209, 211~218, 221~243, 245~250, 252~259, 261~263, 266, 268~272, 280~297, 299~309]

最も多く認められた形態の土壙である。深さは平均20~30cm。遺物は住居跡内にある土壙群から多く出土した。焼土や炭化物を覆土に含む土壙であった。

○B 3類 [DY 1, 18, 19, 107~115, 125, 273~279]

調査区によって3時期に分けられる検出状況であった。DY 272からは第42図の大木8b式併行の小型土器が出土している。

○C 1類 [DY 80, 81, 98, 105, 121, 124, 126~128, 159, 195, 219, 260, 264, 267]

大型の礎を覆土上面中央部に配置する土壙群であり、HY 47の周囲に分布するグループと、HY 43の西南部に分布するグループに大別された。他にHY 53の北東、HY 15の床面にそれぞれ2基検出された。深さは20cm前後と浅く、遺物は認められなかった。礎を配する形態から墓壙と考えられるが確信はない。

○C 2類 [DY 101, 298]

HY 51とHY 49の南方に1基の、計2基が検出された。形態は、土壙上面に石組炉と同様、方形状に小礎を配しての構築である。当初、住居跡に伴う石組炉と考えていたが、半載したところ、焼床は認められず、前述の形態を有する特異な遺構と判断した。DY 101は他に長方形状の自然礎を伴う土壙で、本来この礎は立石してあった状況であった。遺物は、DY 101からは一括土器1点、DY 289からの出土はなかった。

○C 3類 [DY 93, 94, 96~98, 100, 102~104]

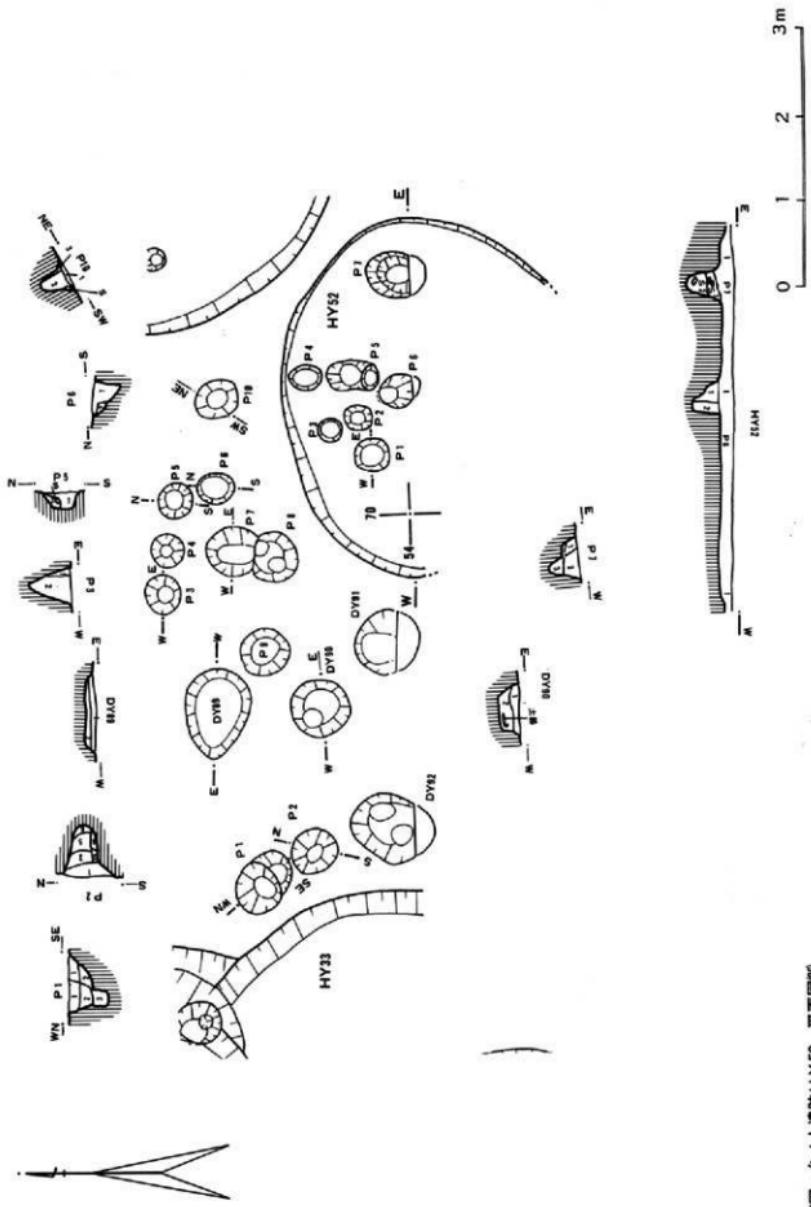
HY 47の東方に集中して認められた。大型の深鉢形土器の口縁部を下にして埋納する土壙群である。土器は上面だけから出土し、覆土には認められなかった。深さは30~50cmで、底面からも遺物は認められなかった。C 1類と同様に墓壙と考えられる。

3. ピット

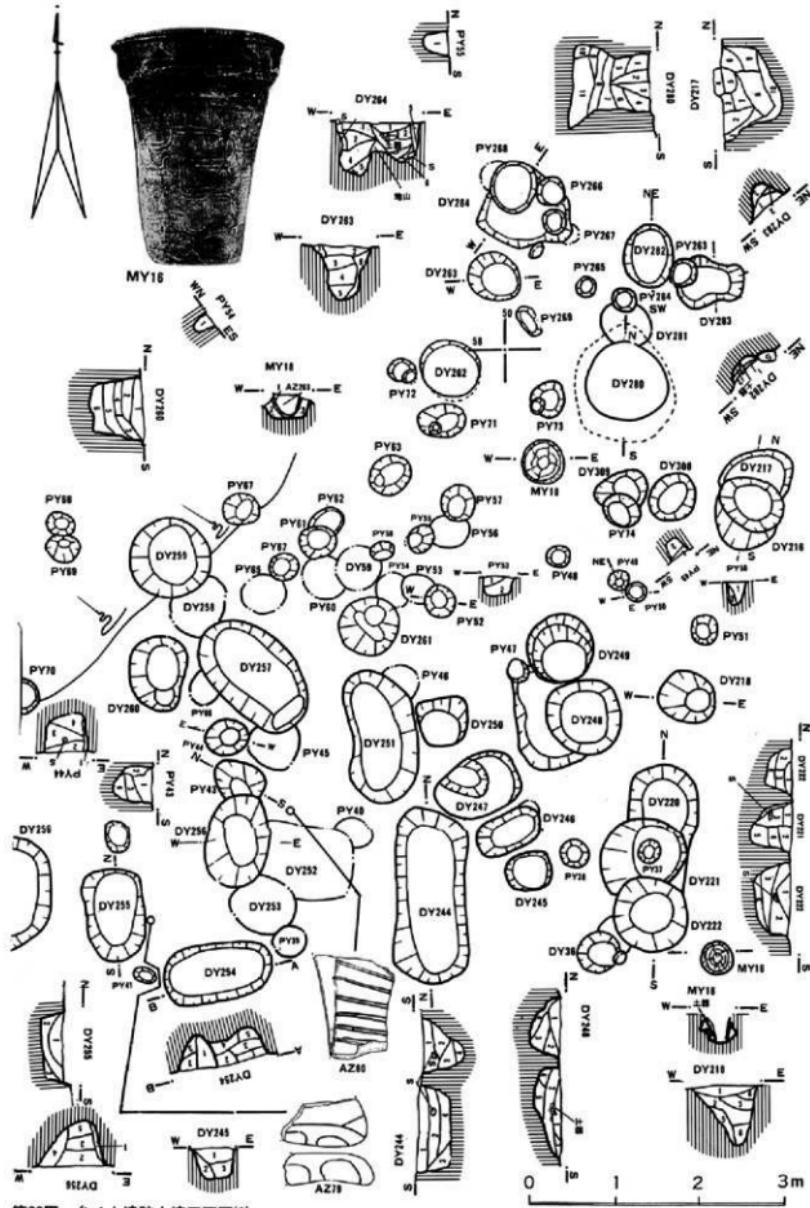
住居跡の柱穴として構築された遺構群であるが、壁面が削平されたり、明確に確認できない堅穴住居跡もあった。それらに付随するのがピット（柱穴）である。今回の調査では掘建柱の住居跡は確認されなかった。

4. 埋設土器

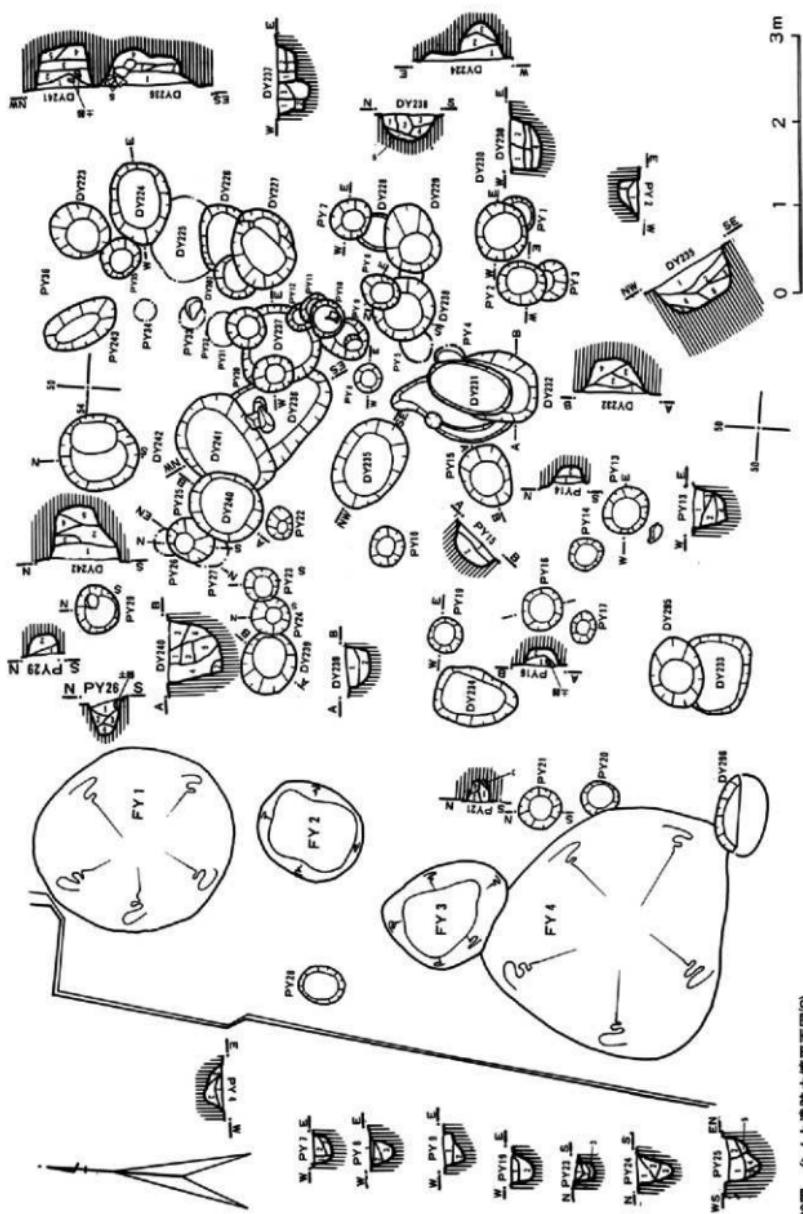
土器の底部を壊して埋設した形態、完形のまま埋設した形態、口縁部だけを壊して埋設した形態等がある。第34図11も埋設土器で、第7図版12を蓋に用いた状況を呈していた。



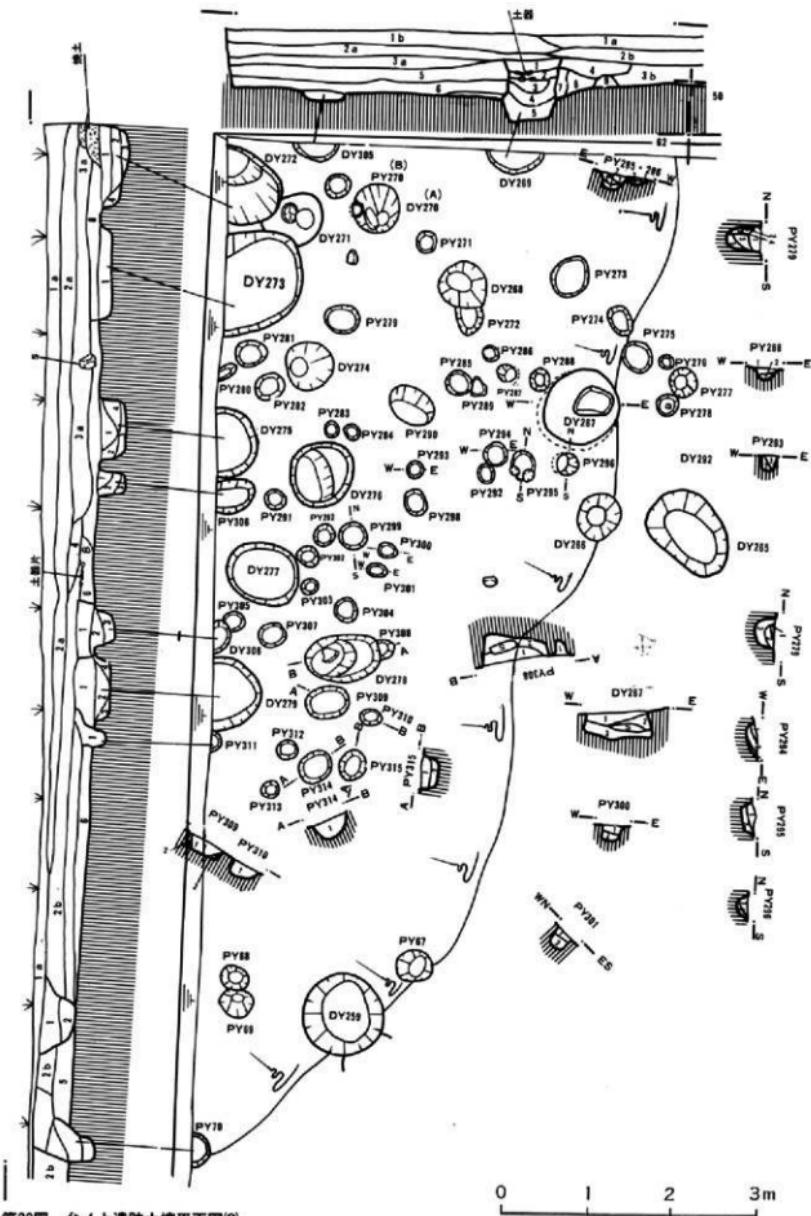
第27圖 台ノ上油跡HY52 平面圖(6)



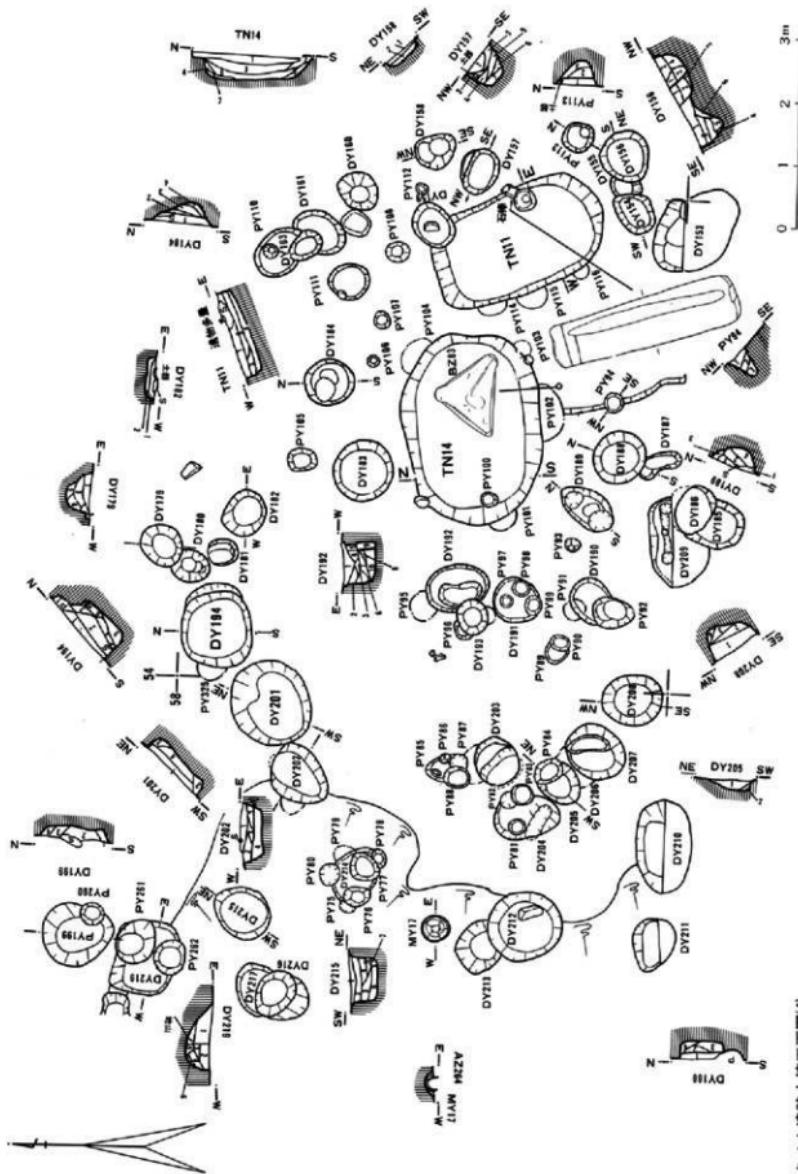
第28図 台ノ上遺跡土壤平面図(1)



第29圖 台ノ上城地盤平面図(2)



第30図 台ノ上遺跡土壤平面図(3)



第31圖 台ノ上遺跡土壠平面図(4)

今回図示した大半は埋設土器である。

IV 出土遺物

今回の調査区約3,000m²から出土した遺物の出土総数は200,739点であった。遺物の大半は土器片が占め、個体分の基準となる底部片から推測すると、10,307に上る量である。これは住居跡一軒で177点の土器を保有したことになる。しかしこれは確認した住居跡数で単純に割ただけの計算であり、必ずしも正しくはない。

出土遺物については分類し、実測図や図版を作成したが、紙面の都合上、全ての遺物については作成できなかったので、細類を加え、代表する形態について図示し、他は点数で示した。遺物を大別すると、土器類、石器類、礫石器類、土製品、石製品となる。さらに土器類は一括土器、復元土器、土器片、石器類は石鏃、石匙、スクレーパー類、打製石斧、磨製石斧、三脚石器、土製品は土偶、土笛、スプーン型土製品、円盤型土製品、三角型土製品、土製品耳飾り等、礫石器類は石皿、圓石、磨石、石棒等、石製品類は岩偶、環状型有孔石製品、石鍤、三角型石製品、三脚型石製品、三脚型刻線石製品などが認められた。

これらの遺物は堅穴住居跡を中心にしており、覆土及び床面からの出土が最も多く、次いで遺構で述べたA 1類、B 2類、C 3類の形態を有する土壇群出土が多く、他は確認面（生活面）に点在した様相を示す。遺物の出土箇所については、遺構挿図の第2図～第31図に示したので参照願いたい。

出土した遺物の中で注目されるものとして、三脚石器のグループがある。すなわち、三脚石器は成島遺跡を中心とした出土が以前から知られていたが、今回は三脚石器も含めて、7形態が出土している。列挙すると、まず三脚石器、三脚型刻線石製品、三角型石製品、三脚型石製品、三角型土製品、三脚型土製品、三脚土製品が上げられる。点数でいえば、三角型土製品が最も多く630点を確認している。

三角型土製品は、調整方法から、磨製と打製に細別される。前者は三辺を研磨により整形したもので、60点出土している。打製は敲打によって整形したもので574点ある。打製による整形は、偶然に三角型になったものと区別しにくいものがあるが、縁片の觀察を吟味し、集計した。故に、発掘調査の際に、單に三角型の土器片としたものが、その後の觀察で三角型土製品になったものである。ちなみに円盤型土製品も出土しており、その数は341点を確認している。円盤型も同様に2種類の整形法が認められる。

これらの遺物は土偶と共に存して出土する場合が多い。また石製品は意図的に壊された破損面を有する遺物も認められた。このようなことから三脚石器のグループは生産に関わる道具よりも、祭祀を目的に製作された第二の道具と呼ぶ方がふさわしい。

土偶は98点出土している。その中でHY 1出土の土偶顔面部とHY 55出土の胴下部が接合した。両者の住居跡は17mの間隔を有する。もう一つはHY 11の胴上半部とHY 47壁面出土の胴上半部の接合である。この住居跡も同様な距離を測る。この2通りの接合例以外

にはTN10出土の脚部が並列して出土し接合した。他に接合は認められなかった。

1. 出土土器〔第32図～第45図〕

台ノ上遺跡から出土した土器は、竪穴住居跡等の遺構内を中心に第Ⅰ次調査及び第Ⅱ調査を合わせ総数で185,009点が検出されている。この中には復元一括土器369点を始め、土偶96点と三角形土製品1,009点が含まれている。これらの土器は、全て縄文中期に位置するものであり、中期中葉期を主体に中期初頭から中期後葉期にかけてまでの土器群で占められている。

ここでは、完形一括土器を中心として全体的な文様構成や特徴等を年代別に区分し、その概要を記すことにする。

A群土器〔第42図2、第36図14第、第5図版2、第7図版14、第18図版1～14〕

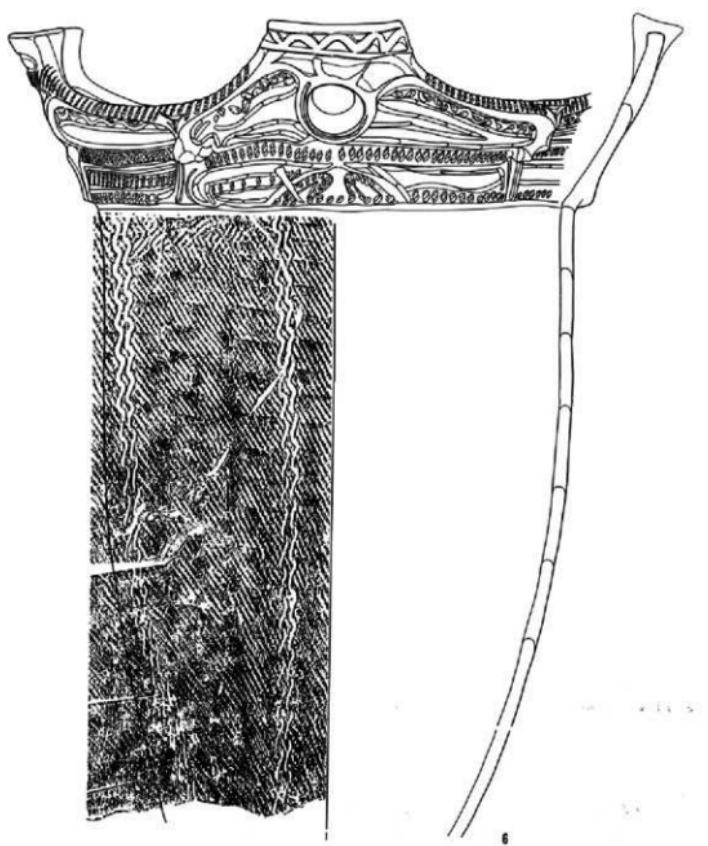
大木7a式に併行する土器群を一括した。本群に属する土器は、調査区の南東部を中心とする包含層より検出され、分類した土器群の中では最も少なく、全体の約10%となっている。本群を代表する文様構成は、半載竹管文を主体としたものと沈線文を主体としたものの二者に大別される。最初の半載竹管文は、連続山形文及び連続円弧文を口縁部から頭部に施文する場合が多く、同部に「X」状の貼付文や沈線文で構成するものが多い。また、第42図2のように半載竹管文で「X」状の同部文様を描き中央にボタン状の貼付文を施すものも含まれている。後者の沈線文は、山形・鋸齒状・円弧を口縁部文様帶として、同部に渦巻文や斜行文・縦の山形文を加えているものが中心となる。

器形は僅かに波状を有する口縁部を中心に外反し、同部が球形にふくらむものと外反した口縁部から同部が僅かにふくらむものの二通りが存在するようである。この種の土器群は県内でも数少ない資料であり、前期末から中期初頭の編年を研究する上で注目される。

米沢市では、類似するものとして万世地区の八幡原A遺跡Ⅲ層土器群、同八幡堂遺跡、それに、平成3年の台ノ上遺跡の調査でまとまって検出されており、今回の調査区の南側から東側にかけての範囲に集中するものと考えられる。

B群土器〔第32図6、第34図11、第33図9・10、第35図18、第37図69、第7図版13、第5図版1・3～5、第6図版6・8～10、第7図版11～13、第8図版16～18、第18図版15～27、第19図版28～57、第20図版52～55〕

大木7b式に併行する土器群を一括した。この仲間はHY18・HY9等の竪穴住居跡や住居跡に隣接した埋設土器の埋甕として検出された。特に調査区の東より集中して出土する傾向があった。器形は大きく発達した波状口縁を有する大型の深鉢形土器を中心にして、折返口縁を示す小型の深鉢形土器や胴部が球形を呈する深鉢形土器、それに浅鉢形土器が伴う。文様構成としては、まず大型の深鉢形土器の発達した波状口縁に主要文様帶を配置するのが特徴で、粘土帶を貼付した突起部が内側に円弧を描く口縁形態や波状突起の部分に鋸状や刻みを有する形態と横位の「C」字状を主体に「S」字状等の突起部を構成した3形態の口縁部突起が共存している。本群の全体的な文様構成は、基本的に口縁部文様帶と同部文様帶に大別され、器形より3類に区分することも可能であった。



第32図 台ノ上遺跡出土土器実測図(1)



1類とした大型の深鉢形土器としては、粘土紐による貼付文と沈線文、さらには撚糸圧痕文等で組み合わせた文様が口縁部文様帶の中心となる。文様帶の構成としては、「X」字状文が変形したと推測される縦位の楕円文や大型の円弧を配置し、周囲に撚糸圧痕と撚糸を帶状に連続施文した圧痕帯や山型状の貼付文を埋めるものが多く、他に渦巻文や第7図11のように平縁で波状を示すものに「の」字状渦巻を組み合わせた文様を撚糸圧痕文と貼付文を用いて横に展開するものもある。第7図版13のように粘土紐を波状に展開したものや第33図10のように大型の円弧を単位文様として描き内部に帶状の撚糸圧痕文を帶状に連続施文したものや撚糸文を円弧状に展開する第5図版5のような構成は比較的多くみられる。また、交互突刺文や円形の穿孔を有するものも含まれる場合がある。

胸部文様帶は、基本的に縄文を施文するものが大半で、僅かに粘土紐を縦位に貼付する第33図9や鋸齒状に配置するものもある。縄文原体はL R・R Lによる3~4本前々多条が中心で、他に無文や1・rの無節縄文で施した土器も含んでいる。

2類とした小形の深鉢形土器は、第35図18のように口縁部に横走する撚糸圧痕文を縦位に押圧し、頭部に円弧状の撚糸圧痕文を展開させ、胸部にも渦巻と円弧を不規則に組み合わせた撚糸文を施したものも存在する。

最後の3類とした浅鉢形土器は、第7図版12のように連続波状文（円弧）と撚糸圧痕文を併用したものや地文の斜縄文の後に撚糸文を施文する手法も比較的まとまって認められている。米沢市内では、広幡町の成島遺跡に1類に併行する土器群が認められている。

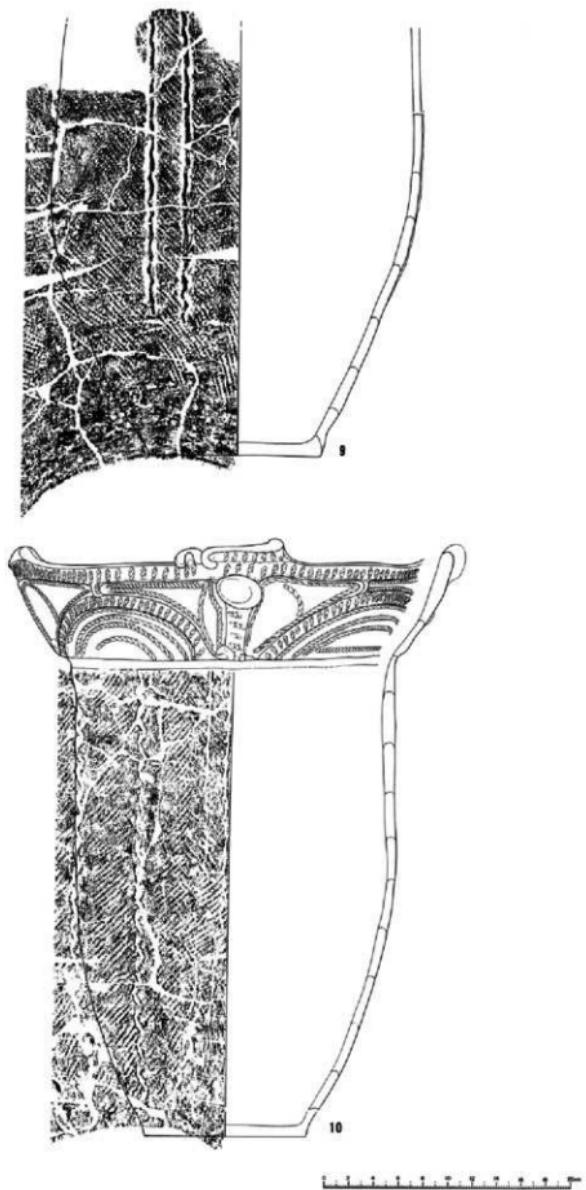
C群土器〔第36図16・25・38、第34図29、第35図19・22・64、第42図40・31・37、第43図30・41、第45図23・62、第6図版7、第8図版19~22、第9図版23~26、第10図版28~30、第11図版31・33・35・36、第12図版37~41、第13図版42、第16図版62、第17図版64、第20図版69~71、第21図版72~84、第22図版85~101、第23図版102~111、第27図版174~177〕

大木8a式に併行する土器群を一括した。竪穴住居跡及び土壤を中心に出土したもので、台ノ上遺跡の土器の約4割を占めている。主要文様は基本的に大きく5類に分類される。

第1類には口縁部文様帶として発達した粘土帶で構成するもので、「X」状の把手や「S」字状・「C」字状・渦巻帶を立体的に配したものであり、L R L・R L Rの複節の原体による縦位の撚糸圧痕文を連続施文したものや箆状工具を用いた連続突刺文に横位の粘土紐などが付随する。

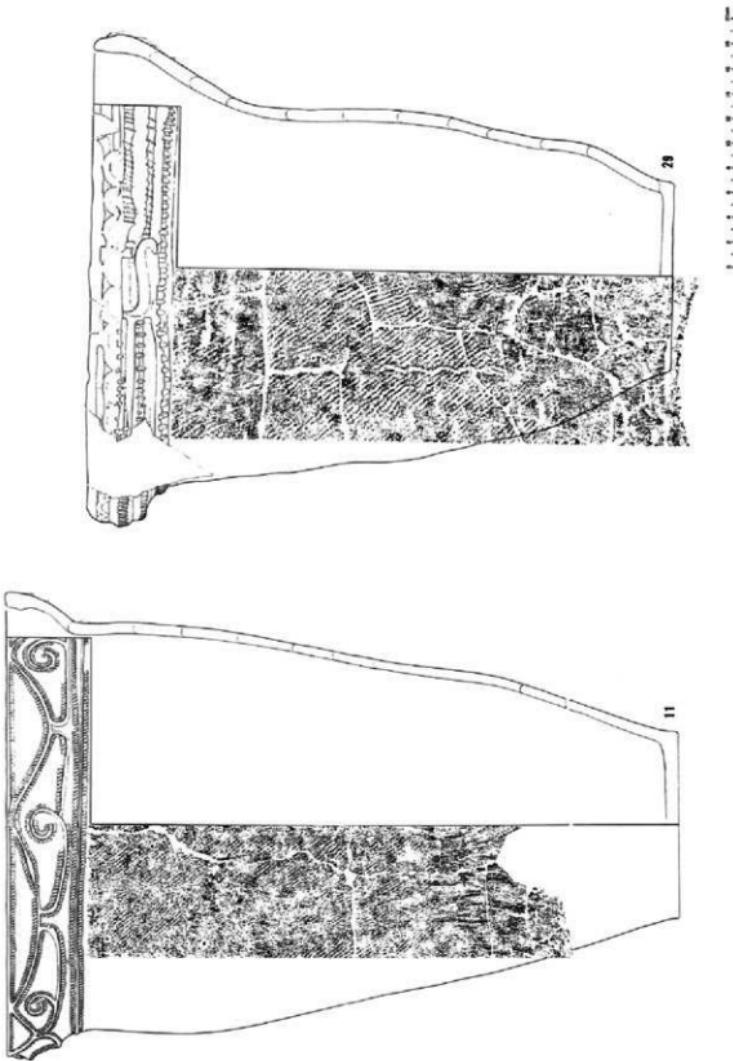
胸部文様帶としては、沈線文及び粘土紐の貼付文を施文法として3本線を基本に「S」字状渦巻文、蔓状文を描いた文様が多い。器形はキャリバー形や外反してゆるやかに胸部が張る大型の深鉢形土器が主流となっており、第36図25、第43図41、第45図23・62らが代表となる。

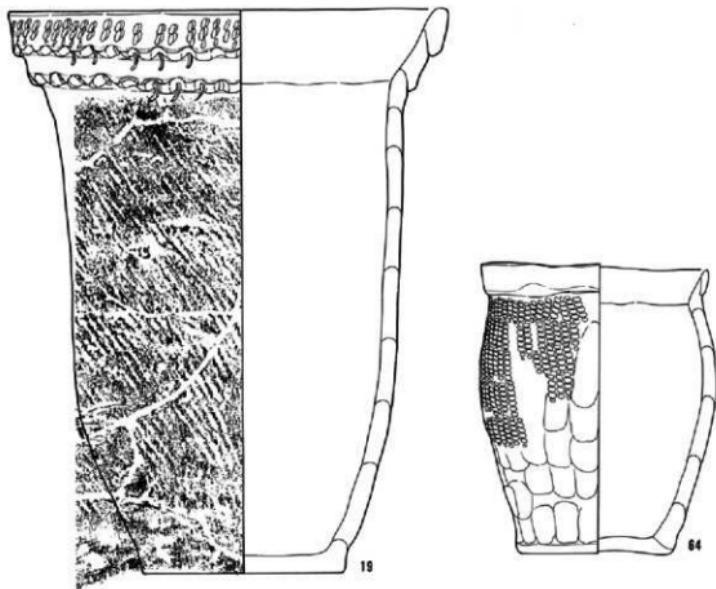
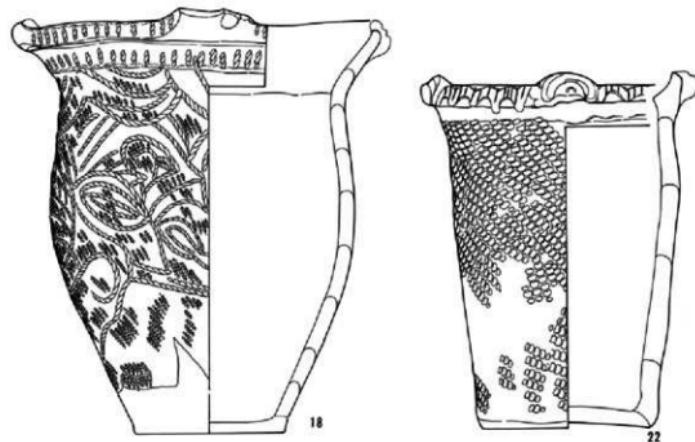
第2類の土器としては口縁部が内曲し、頭部から胸部にかけてバケツ状に垂下する深鉢形土器で、第42図37の「C」状の把手を有するものも含まれているが、大半は平縁が中心で、口縁部文様帶に連続突刺文や撚糸圧痕文に弧状や山形状の貼付文を施すものが多く



第33図 台ノ上遺跡出土土器実測図(2)

第34図 台ノ上城出土土器(圖3)





— 1 cm —

第35図 台ノ上遺跡出土土器実測図(4)

みられる。胴部文様帶は、沈線文や貼付文を組み合わせてクランク状文や方格文に渦巻文や「C」字繩文を加えて構成されている。第42図37、第42図40、第43図30等が代表とされる。

第3類の土器はゆるやかな内曲、もしくは外反した口縁部がそのまま底部に向かって垂下する器形を呈しており、縦位の撚糸圧痕文を帶状に施文する第35図19や突刺文と円弧文を配した第34図29が代表である。胴部は、繩文原体を展開するのが特徴で、LR・RLの前々多条の繩3及び4本が多い。

第4類の土器は口縁部が外反し、胴部がふくらむ短身の深鉢形が特徴で、口縁部文様帶に「C」字状や「X」字状の貼付を有し、撚糸文や複節繩文等を加えたもので構成されている。胴部文様帶は、繩文を展開した後に沈線文による渦巻文や円弧文で描いている。第36図38は渦巻と円弧を横位に展開したもの。第36図16は縦位の渦巻文と連続する円弧で構成している。

第5類の土器はキャリバー形を有する器形を示し、無調整の粘土紐による渦巻文や懸垂文によって構成している。第45図62はこの類の代表となるが、沈線文で構成する第12図版39等も含まれる。

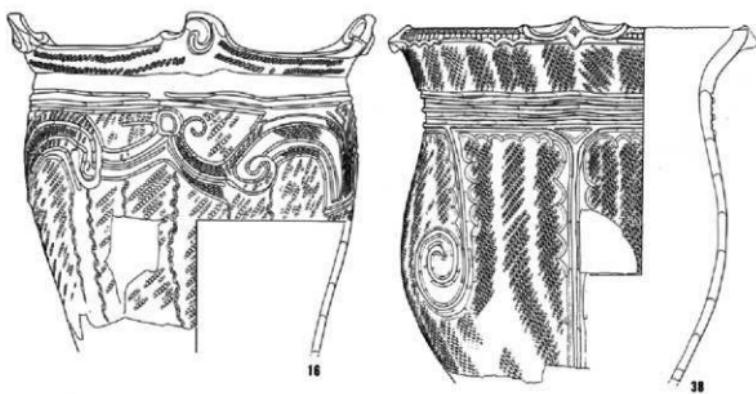
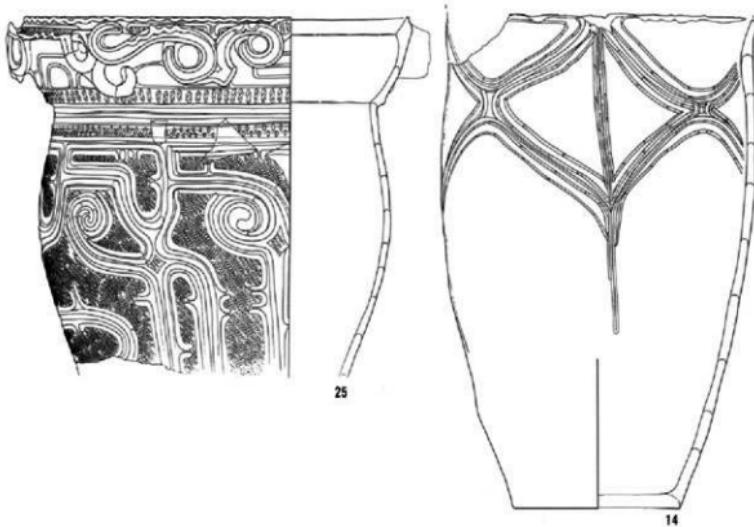
最後の第6類の土器は小形土器の仲間で、円弧の貼付に突刺文を加えた口縁部に胴部が筒型に垂下する第35図22や折返し口縁を有し、胴部がふくらむ第8図版21等がある。いずれも前々多条の繩3本を胴部に施文している。

D群土器〔第38図27・46、第37図53・20・48・60、第39図52・55、第40図45、第41図49・63・56・32・54、第43図50・51、第44図67・34・68・61、第45図44・58、第7図版15、第8図版20、第10図版27、第11図版32・34、第13図版43～45、第14図版46～51、第15図版52～57、第16図版58～61、第17図版63・65～68、第23図版112～114、第24図版115～129、第25図版130～142、第26図版143～157〕

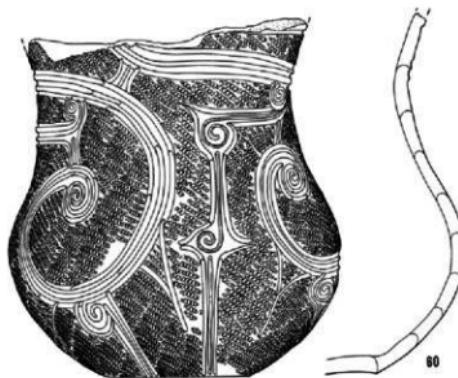
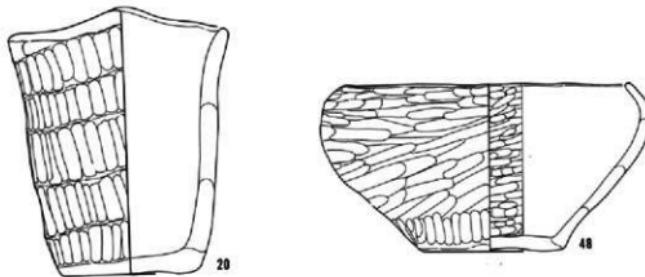
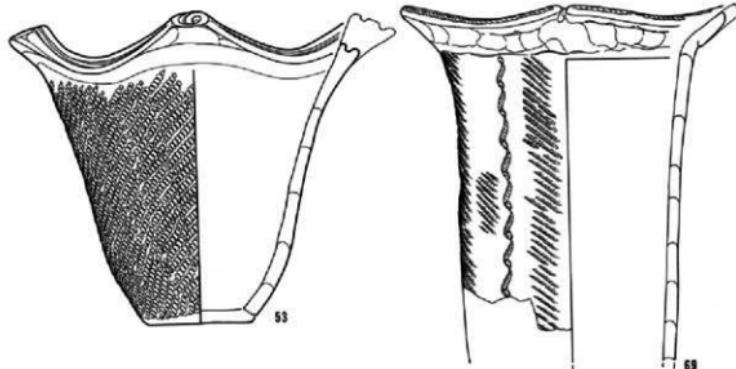
大木8b式に加わる土器群を一括した。堅穴住居跡と土壤内を中心にまとまって検出されたもので、全体の約5割り近く認められる。この仲間も器形と文様構成から次の6類に分けられる。

第1類の土器としては、第45図44・58が示すようにキャリバー形を基本とした大型の深鉢形土器である。台ノ上遺跡の代表的な文様構成であり、口縁部文様帶に発達した渦巻文を主体とする立体的な把手が特徴となる。一方、胴部文様としては単位文様を区画する懸垂文を縦位に配置し、中心部に大きく発達した「S」字状渦巻文を主要文様としている。さらに周辺に前後する形で渦巻文と懸垂文を加えて全体を構成している。地文は、LR・RLの前々多条の繩3～5本を基本に複節繩文を配したものも含まれている。ただし、第40図45に関しては縦位に渦巻文と懸垂文で構成している。

第2類の土器は、キャリバー形の器形を有する深鉢形土器の仲間でも小型のものであり、隆線文と調整沈線文による口縁部文様帶と胴部文様帶を区画する無文帶が特徴となる。口縁部文様帶は「の」字状渦巻文を上下に配し横に展開するのが中心で、胴部文様帶には「の」字状渦巻文と嘴状文を組み合わせて構成するものが大半で、第37図60、第39図52、第41図

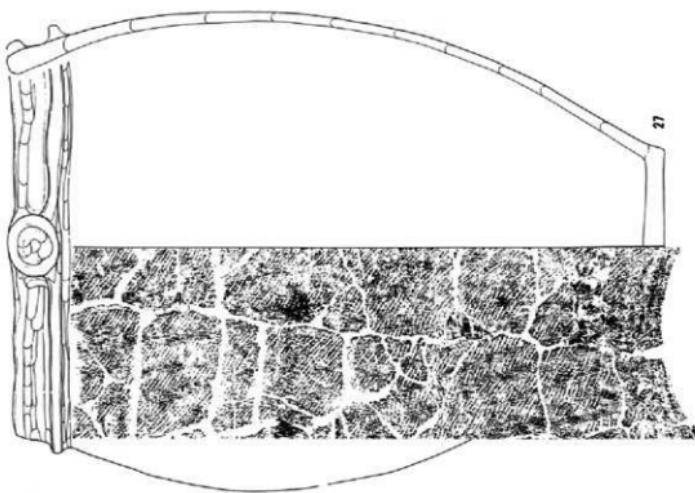
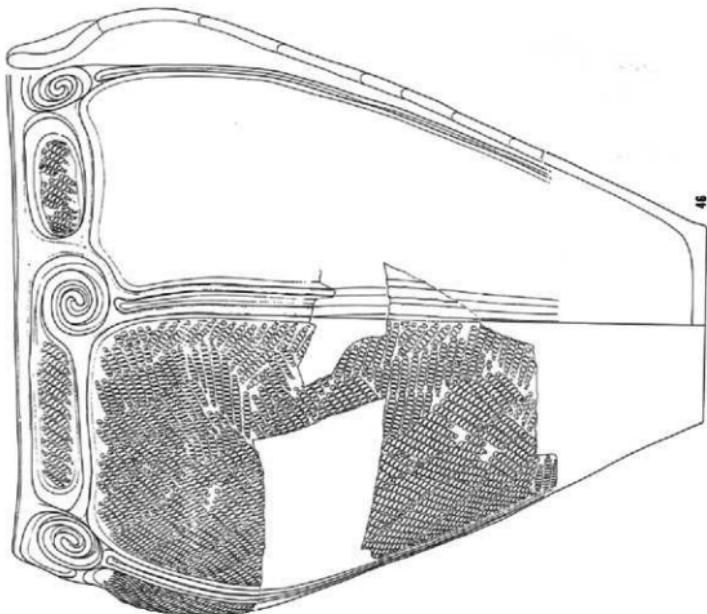


第36図 台ノ上遺跡出土土器実測図(5)



第37図 台ノ上遺跡出土土器実測図(6)

圖38 台ノ上遺跡出土土器素描圖(7)



49・56・54、第43図51、第44図67・34・68がある。ただし、第43図50に関しては、胴部文様帶は先の第1の土器群に近いものといえる。

第3類の土器は波状口縁を示す小型の深鉢形で外反する器形が特徴となる。波状口縁の突起部に渦巻文を配し、胴部に「の」字状渦巻文と懸垂文を組み合わせた第41図56を中心となるが、第37図53のように縄文で統一されたものも含んでいる。

第4類の土器は口縁部が内曲した壺形土器が特徴で、口縁部に施文された4単位の渦巻文や円文を置き、胴部を前々多条の縄3本～5本で統一するが多い。また、第38図46のように渦巻文の直下に懸垂文を配する場合もある。

第5類の土器として浅鉢形土器がある。2単位の渦巻文と渦巻文に交互渦巻を配した2単位の把手を配した波状口縁を呈する内曲の浅鉢形土器であり、胴部に縱位に展開する渦巻と懸垂文を加えて文様を描いている。

最後の6類は小形土器土器を一括した。いずれも丁重に磨いた無文を示しており、第37図20は2単位の波状を有する外反する小形土器で、第37図48は内反する小形土器である。

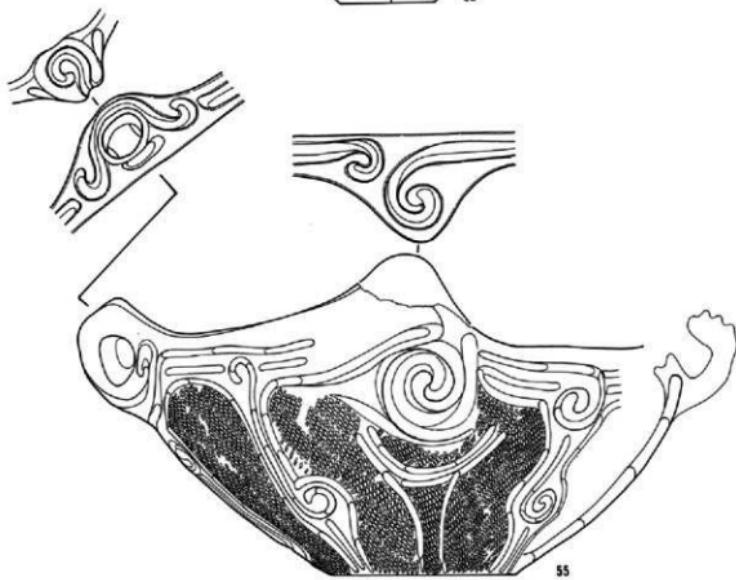
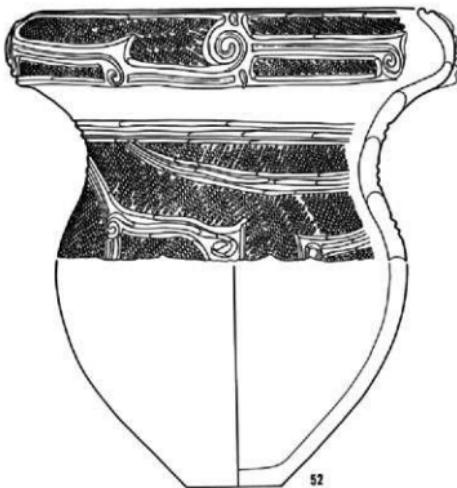
E群土器〔第27図版158～173〕

大木9式に属する土器群を一括した。調査区のほぼ中央付近の上層から出土したもので、本群に伴う遺構は含まれていない。口縁部及び舌状の波状口縁に稜線による渦巻文を主要文様として縱方向に懸垂文や渦巻文を構成したもので、他に突刺文や多条線を配した浅鉢形土器などがある。

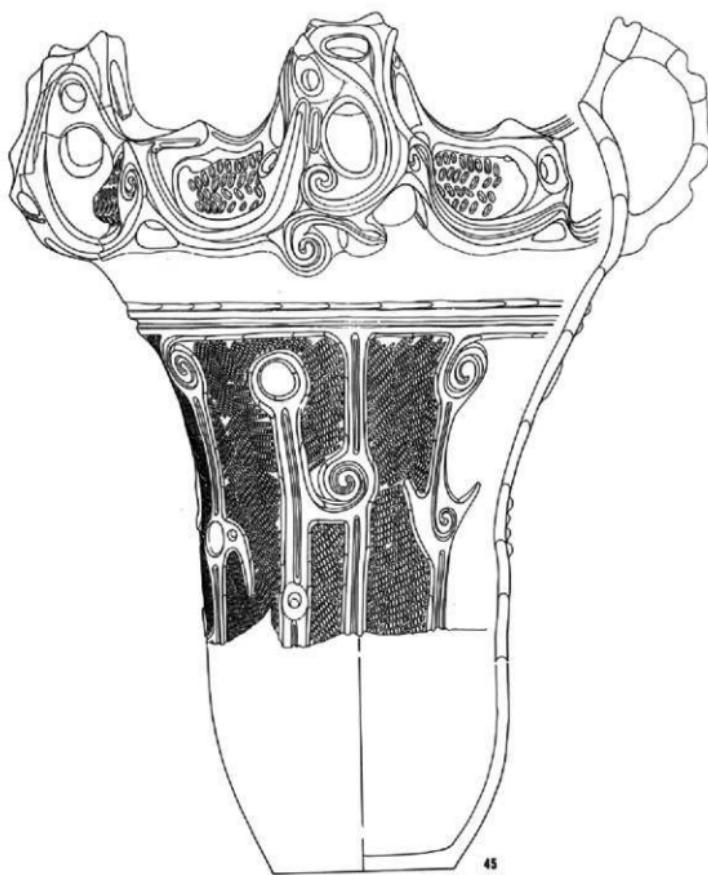
以上、簡単に台ノ上遺跡遺跡の出土土器について触れてみたが、注目される土器群としては、B群土器～D群土器が上げらる。いずれも堅穴住居跡の内部からの出土で占められており、住居後の新旧関係の吟味と住居廃絶後の廃棄遺物の検討から、単位文様や文様構成の変遷を把握することが可能な資料である。B群土器は、口縁部突起の形態で新旧関係をみいだせる。円弧状の突起部や刻を呈する突起の特徴は縄文前期末の大木6式の新式に発達する拳状の波状口縁に起因しているものと推測され、粘土帯による「C」字・「S」字貼付文は前者に後続する口縁部突起と考えられる。

C群土器は撚糸圧痕の示される4類や粘土紐を円弧状に口縁部に施文する3類は大木7b式に後続する土器群とみられ、把手の発達の未熟な2類、発達した把手と渦巻文を胴部に採用した1類、把手部分が省略され無調整の粘土紐による渦巻文を主体とした5類と基本的に移行するものとみられる。

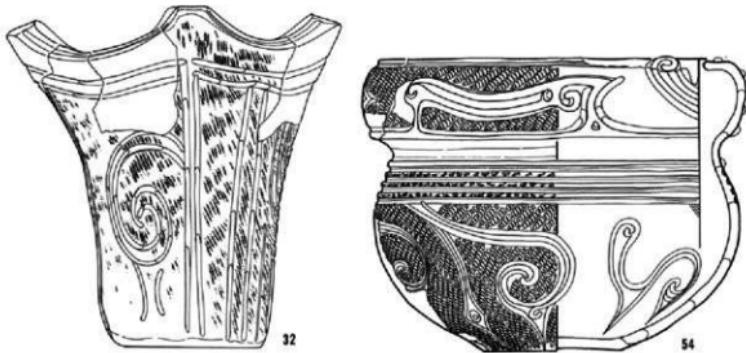
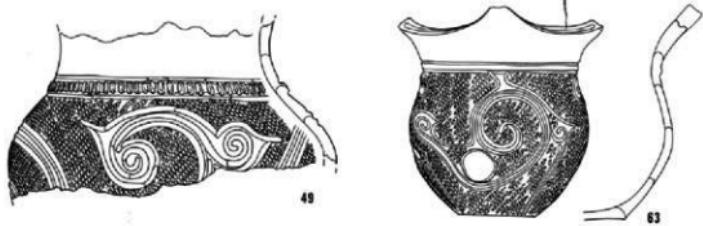
D群土器としては、外反する波状口縁を示す3類土器が大木8a式に後続する可能性が高く、キャリバー形を有し沈線文や隆線で渦巻文と「S」字状渦巻に嘴状文が伴った構成をなす2類の小型の深鉢形土器に移り、渦巻文を主体に発達した把手に代表される大型の深鉢形土器の1類、口縁部文様帶に渦巻文を配置する大型の壺形土器4類への変容が基本となる。5類の浅鉢形土器や3類に加えている第44図61のように把手が退化し、発達した波状口縁に渦巻文を主体とする構成は大木8b式の中でも大木9式に移行する段階の土器群と考えられ、E群土器に近い存在といえる。



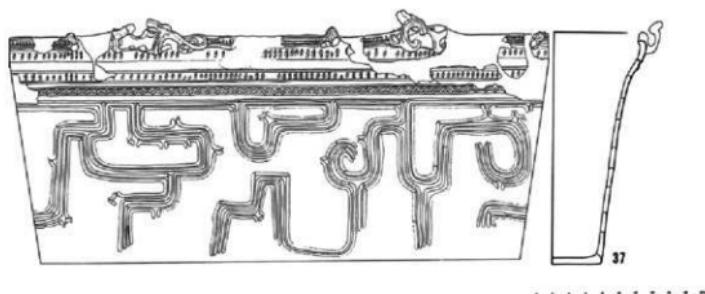
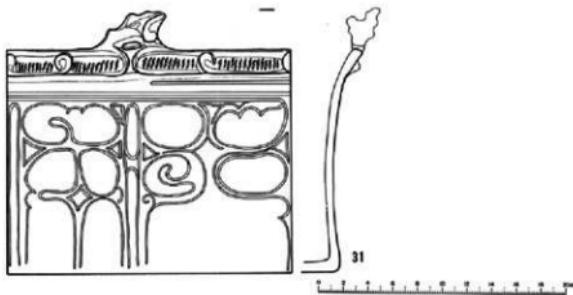
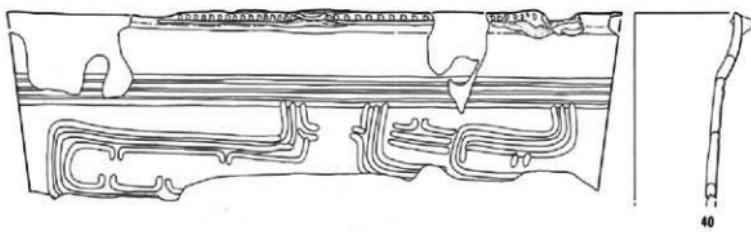
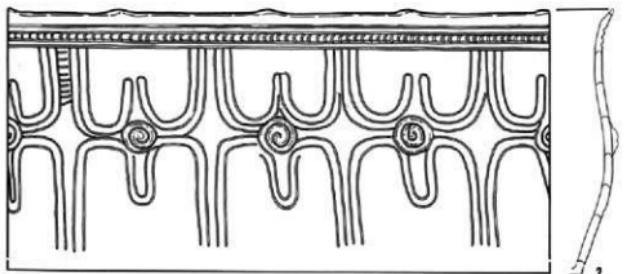
第39図 台ノ上遺跡出土土器実測図



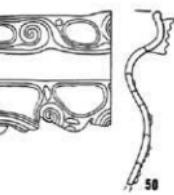
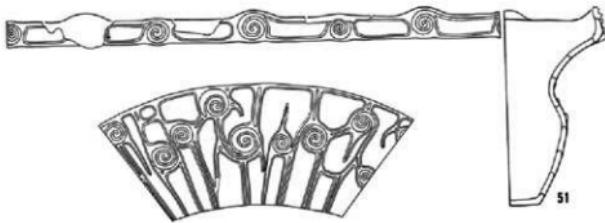
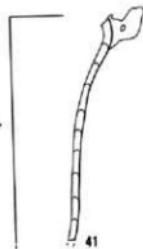
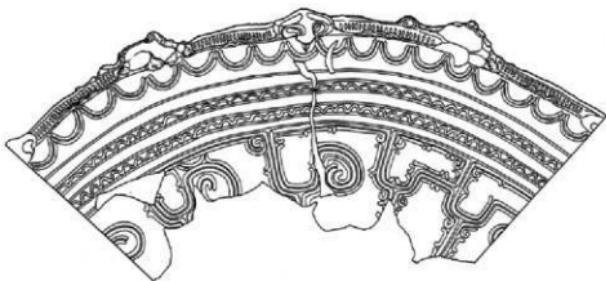
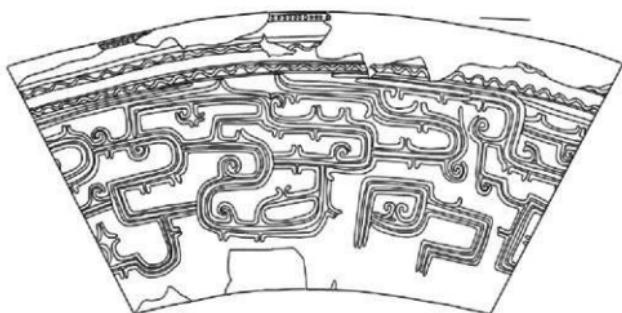
第40図 台ノ上遺跡出土土器実測図(9)



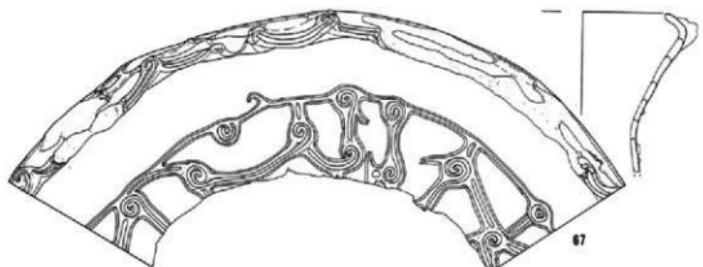
第41図 台ノ上遺跡出土土器実測図



第42図 台ノ上遺跡出土土器展開図(1)

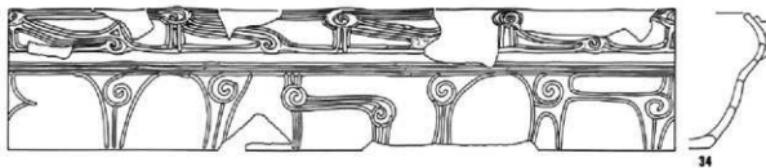


第43図 台ノ上遺跡出土土器展開図②

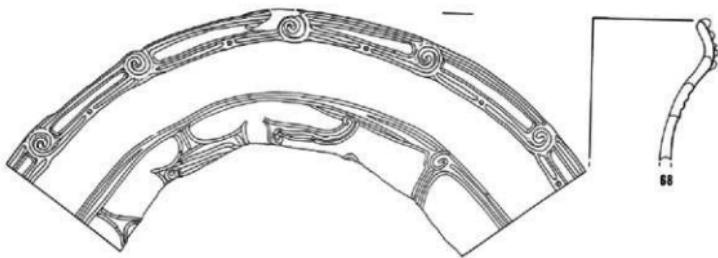


67

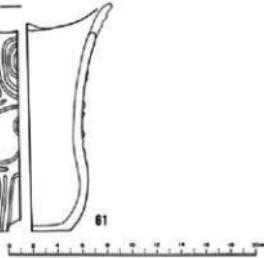
— 1 —



34



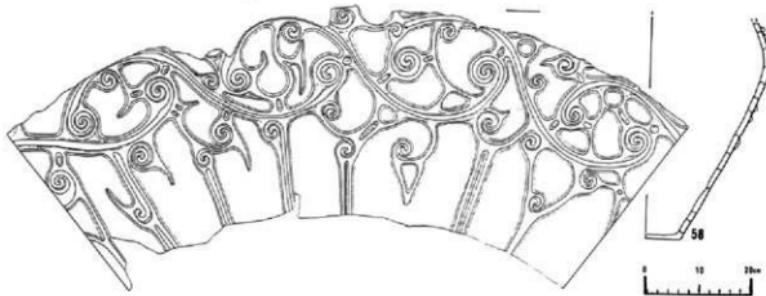
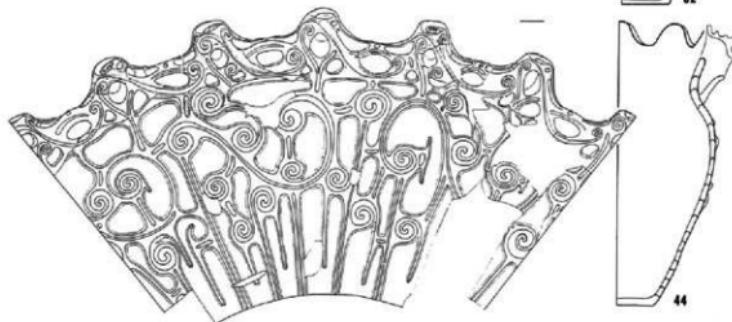
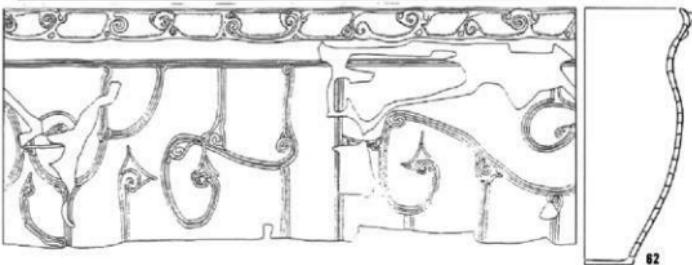
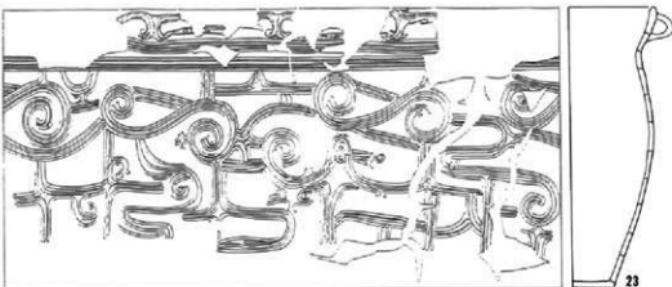
68



61

— 2 —

第44図 台ノ上遺跡出土土器展開図(3)



1 10 20cm

第45図 台ノ上遺跡出土土器断面図(4)

2. 土偶〔第46図～第50図〕

総数で99点出土している。3点が接合したことにより、挿図番号は96となっている。これらの土偶は人間の形、特に女性をモデルとして製作され、壊されて捨てられた状況で出土している。体の部分で見てみると、頭部が11点、胸部上半部35点、胸部下半部31点、脚部は22点となる。

大きさが最大のものは第46図1、最小は第50図84と推測される。ちなみに日本最大といわれる山形県舟形町西ノ前遺跡出土の土偶が45cmである。本遺跡出土の土偶は、頭部と胸下半部が欠損している形態であり、現長で15.1cmを測る。欠損した部分を、出土した土偶から復元すると、胸下半部及び脚部が20.0cm、頭部が6.0cm、全長は41.0cmと推測したい。最小は約5.0cmと復元される。

出土した土偶は、第50図92・93の中空土偶の脚部2点を除き、全て板状土偶に分類されるが、第50図78のように、リアルに足を表現したものもある。この3点を除けば、手・足などを抽象化した表現法を用いて製作している。次に分類して土偶を見てみよう。

○ a類〔第46図1〕

前述した大型土偶であり、1点出土している。沈線文を首・乳房の上・脇腹に施した土偶である。乳房の表現は舟形町西ノ前遺跡出土の土偶に酷似している。

○ b類〔第46図2～12〕

顔の部分を一括して本類とした。第46図2は接合によって完形となった。どれをみても違った表情を持つのが特徴といえる。同図10・11・12は簡素化した形態であり、以前の調査区の包含層から出土している。有孔箇所も複数認められる。

○ c類〔第47図13～18〕

文様が列点を描いた土偶であり、6点出土している。第47図15は接合土偶である。

○ d類〔第47図19～30〕

細沈線で文様を描いた土偶を本類とした。腹面・背面の両面に文様を施す形態である。

○ e類〔第47図31～52〕

胸下半部の土偶であり、縦位・斜位の沈線文を両面に施す。両脚部の間に空間を有する。第48図46～52は小型の形態を有す土偶である。

○ f類〔第49図53～60〕

腹部を強調した土偶の形態を本類とした。腹部はいずれも突き出ている。

○ g類〔第49図61～83、第50図78〕

脚部を本類とした。この中で79・80は、足の指を表現した土偶の形態を有する。内側にやや湾曲する脚部である。第50図78は足を表現した形態であり、1点出土している。

○ h類〔第50図72～75・87・88〕・i類〔第50図89～91〕

座った形態を呈す土偶をh類、棒状を呈す土偶をi類とした。

○ j類〔第50図92・93〕・k類〔第50図94～96〕

中空を有する土偶をj類、繩文を施した土偶をk類とした。3点出土。